

生 鵠 沼

久 久 比 奴 末

はまゆうと桜貝と

海光るわが故里

第 9 6 号

長谷川路可 生誕110周年、没後40周年記念特集

長谷川路可伝〔中〕 渡部 瞭 ... 1

特別寄稿①

内藤千代子と鵠沼 嵯峨 景子 ... 21

特別寄稿②

鹿地事件とは何か？

～白公館の闇～ 猪俣 良樹 ... 41

劉生研究

もう一人の「村娘」 岡田 哲明 ... 50

藤沢・鵠沼の歴史をカメラで残した

「鵠沼書店」福地誠一さんのこと 桑原 玲子 ... 60

「鵠沼を語る会」活動の記録 総 務 部 ... 63

編集後記 66

『新編相模風土記稿』（天保13年、1892）に、「鵠沼村久久比奴末牟良」とあり、当時は“くぐいぬま”と呼んでいたことが分かる。

鵠 沼 を 語 る 会 発行

長谷川路可伝(中)

渡部 瞭(会員)

目白時代 長谷川一家が鶴沼から目白に居を移した翌年=1938(昭和13)年は、路可にとってつらく悲しい出来事が立て続けに起こった年であった。

先ず、正月から愛妻=登茂が結核のため中野区江古田にあった東京市療養所(通称=中野療養所)に入院した。自転車で毎日のように見舞いに来た路可は、一躍病棟の有名人になったという。

続いて3月2日、恩師=松岡映丘が58歳で他界した。前年に《帝国美術院》から改組された《帝国芸術院》(《日本芸術院》の前身)の会員になったばかりの働き盛りの死であった。

また、老齢で既に病身だった母=たかのために、急遽、母屋部分を増築し、母と、その面倒をみていたお手伝いさんを鶴沼から呼び寄せた。その甲斐もなく、9月7日、母=たかは亡くなった。永らく親一人子一人の関係であっただけに、大きな打撃であったに違いない。母の墓は、路可の手で鶴沼の夢想山本眞寺墓地の妹=ゑいの墓に隣り合って建てられた。五輪塔の墓には、現在路可の分骨も収められている。

さらに、12月19日には、母=たかの独身時代からの知己とも伝えられる実業界の大物=藤山雷太(1863-1938)が世を去った。歌舞伎座の経営や帝劇の創設にも関わり、文化に理解が深かった雷太は、生前路可の作品を多数買い上げ、いわばパトロンであった。この段階では、《藤山コンツェルン》の経営権は実子=藤山愛一郎(1897-1985)に譲っていたが、そのけじめのためか、大震災復興期に建てた《藤山工業図書館》の改修を翌年の1939(昭和14)年に企画していた。その内壁を飾る壁画を路可に依頼していたのである。路可は遺志を受けて『啓示と創造』／『科学と芸術』と題するフレスコ壁画を完成させる。

《藤山工業図書館》は、1943年12月藤山愛一郎から慶應義塾に寄贈され、1957年には千代田生命保険会社に売却されて図書館としての役割を終えた。その際、建物解体により壁画も遺失した。

この1938(昭和13)年における特筆すべき仕事に、尾張徳川家納骨堂“崇徳廟”(愛知県瀬戸市定光寺)にフレスコ壁画を制作したことが挙げられる。

廟は儒式で、祭文殿その他の建築は、尾張初代藩主徳川義直公の知遇を受けた帰化明人陳元賛^{ちんげんぴん}の設計になるものと伝えられ、本堂とともに重要文化財に指定されている。

2層の祭文殿の基壇をなす1階部分は石垣に囲まれ、この内部に長谷川路可が描いたフレスコ壁画があるのだが、一般には公開されていない。こうした暗閉所はフレスコ画にとって好ましい環境ではない。描いた路可自身もそれが心配だったようで、イタリアから帰国後、弟子のF.M壁画集団の学生たちと久しぶりにここを訪れ、壁画が無事であることを確認し、安堵したという。

後にテレビ撮影に同行した原田氏の撮影された写真によれば、納骨室の正面には石造の阿弥陀如来倚坐像が安置され、その背後に路可による極彩色の壁画が描かれている。ことに左右の日光菩薩^{がっこう}・月光菩薩^{りゅうざう}立像は、石像と併せて三尊像を形成し、石像背後には三基の仏殿と飛天などが描かれ、西域の石窟を彷彿とさせる。左右には金箔を貼った納骨棚があり、天井を支える円柱にも三色を基調とする装飾が施されている。勿論これらの制作には滞欧時代の壁画模写の経験が大いに役立ったに違いない。

この年にはまた、勤務先の東京文化服装学院大講堂の大黒板の左右に『西洋服装史』と題する1対のフレスコ壁画を描いている。これは1945(昭和20)年5月25～26日の第三次東京大空襲で焼失し、モノクロームの写真しか遺っていない。それによれば、各時代の服を装った十数人の男女が描かれている。壁画はひととき異彩を放って全ての人々に強い印象を与えたという(文化服装学院40年の歩み)。

一方でこの年路可は、東京美術学校日本畫科の同窓生=遠藤教三(1897-1970)・狩野光雅(1897-1953)と3人で《三人展》を開催した。以後、この展覧会は1941(昭和16)年に《翔鳥会》展と改称して毎年開催され、少なくとも1943(昭和18)年の第6回までの記録が残っている。

片瀬教会 鵜沼時代の路可は、鎌倉の天主公教会大町教会(現=カトリック由比が浜教会)に所属し、片瀬の山本家の仮聖堂でのミサにも出席した記録がある。

1891(明治24)年の夏、片瀬の旧家の当主で鎌倉郡の郡長であった山本庄太郎が避暑に訪れたカトリック・マリア会のヘンリック神父と出会い、宿を提供する。神父が暁星学園を創始して間もない頃のことであった。これがきっかけで二男の

信次郎が暁星中学校の4期生(5人のうちの一人)として入学することになり、在学中にカトリックに入信する。続いて三男の三郎も暁星に入学し、カトリックに入信した(彼のことは[上]の「ボン・サマリタン」の箇所でも若干触れておいた)。

信次郎は暁星から海軍兵学校(第26期)に進み、フランス語に堪能でクリスチャンという異色な帝国海軍軍人として国際的にも活躍し、また皇太子時代の昭和天皇の外国語教育掛となり、少将にまで昇官する。一方で公教青年会の会長として会を全国組織化し、1923年に創刊した『公教青年時報』(現在の『カトリック新聞』)などカトリックの出版や研究を支える基礎を築いた。

山本家は代々片瀬の名刹本蓮寺(日蓮宗)の檀家総代を務めていた。このためもあって庄太郎は信次郎・三郎を暁星に入学させたものの彼らのカトリック入信には難色を示したという。しかし、1919(大正8)年、病床にあった庄太郎はカトリックに入信し、間もなく天に召された。これを機に信次郎と三郎は山本家の一室に仮聖堂を設け、ミサが捧げられるようにした。これがカトリック片瀬教会のスタートとされる。路可の鶴沼時代は、この仮聖堂の時代だった。

1936(昭和11)年、片瀬海岸の山本家所有地が提供され、シャルトル聖パウロ修道女会により《片瀬乃木幼稚園》が設置され、翌1937年には《片瀬乃木小学校》が、さらに1938年、《乃木高等女学校》が設置された。これが戦後に《湘南白百合学園》と改称され、今日に至るのである。

この「乃木」というのは、日露戦争で活躍し、明治天皇に殉死した乃木希典^{まれすけ}陸軍大将に由来することはいままでもない。乃木大将は退役後学習院院長に就任し、当時片瀬にあった水練場にも毎夏訪れた。その時の宿を提供したのが山本家である。軍事色が強まる昭和10年代、新設の学校名に軍人の名を冠するにあたり、山本家ゆかりの乃木大将が選ばれたのであろう。

1937(昭和12)年、東京司教区から分離独立して横浜教区が新設された。この際、教区の拡充のために湘南地区に教会が必要になり、仮聖堂でミサが捧げられていた片瀬に新たに教会が建設されることになった。

山本家は同家の名を冠した「山本橋」の海岸側、《片瀬乃木小学校》と境川(片瀬川)の間の土地を提供し、ここに《カトリック片瀬教会》の聖堂が建てられることになった。

聖堂の建物は東京大司教の要望で純日本風の建築様式にすることになった。京都・奈良の建築物を参考にして寺社風の聖堂が設計され、大司教の認可後、1939(昭和14)年の「聖ヨゼフの祝日(3月19日)」に献堂された。

純日本風の建築様式は、外観ばかりでなく、内装にも採り入れられた。現在は椅子式になっているが、建築当初は畳敷きだったそうである。

正面祭壇の両脇には床の間が設けられ、向かって左の床の間には長谷川路可の描いた『エジプト避行』[日本画]、右側には『聖家族』[日本画]の軸が現在も常掲されている。また、両側は障子を模したやや低めの窓になっており、その上部の壁にはこれも路可の手になる『十字架の道行き』14面の色紙が額装されて掲げられている。

これらの制作依頼は聖堂建築が企画された1937年段階と考えられるが、献堂された1939年には路可は鶴沼を去り、目白に移っていた。現在片瀬教会のホームページには「祭壇正面の2カ所の床の間を飾る2幅の掛け軸(聖家族、エジプト紀行)と両側の壁に飾られている「十字架の道行き」は仮聖堂の時から^(イイ)の信者であった当時鶴沼在住の長谷川路可画伯(国内外に数多くの宗教作品を残したカトリック画家)の作品です。」とある。「当時」を「仮聖堂の時」とすればこの記述は正しいが、飾られた時には「鶴沼在住」ではなかったことになる。また、「紀行」は「避行」の誤りであり、右側の軸は当初『ルルドの聖母』[日本画]で、『聖家族』は1946年に描かれた(『長谷川路可画文集』年譜)。

教壇 『長谷川路可画文集』の年譜によれば、路可は生涯にわたって10以上の学校の教壇に立っている。しかし、その多くはフランスで修めた西洋服装史に関するもので、美術家として修得した日本画やフレスコ・モザイクといった造形に関する本格的な教育については、戦前の《日本大学専門部芸術科》での経験しか見あたらないのは不思議である。

主だった学校においてはそれぞれの学校のスタートあるいはリスタートといったエポックに関わっている。これは、旧制では専門学校、新制では短期大学等へ昇格の際、「服装史」が必置科目であるにも係わらず、担当の有資格教員が少なかったからという事情があるとされる。

これまでに記した学校の他、《共立女子専門学校》(1939年～)、《東京家政専門学校》(1940年～)、《恵泉女学園高等部》(1946年～)、《日本女子大学》(1958年～)、《昭和女子大学短期大学部》(1959年～)でいずれも服飾史を担当しているが、《東京家政専門学校》と《日本女子大学》以外は短期間、臨時的なものであったと思われる。

日本大学が芸術学部の前身である美学科を法文学部内に設置したのは大正10年

だが、以後紆余曲折の末、1939(昭和14)年に専門部芸術科として現在の江古田校舎に移転する。その折、専門部芸術科は創作科・演劇科・映画科・美術科・音楽科・商工美術科・写真科・宣伝芸術科の8専攻科に増設された。この段階で路可は美術科に招聘され、日本画・フレスコを担当することになった。

1941(昭和16)年に路可は日本大学江古田校舎講堂に天平時代の壁画を題材とするフレスコ壁画を制作し(題名不詳。1966年以前に建物解体により遺失)、一方、日大の学生と《日本フレスコ壁画協会》を結成。第1回展を日動画廊で開催している。しかし、やがて始まる太平洋戦争で活動もそれまでだったらしく、以後の記録はない。

現在も創作活動を続ける田中^{たかし}岑(1921-)は、おそらくそのメンバーと思われ、戦後も路可の壁画制作の助手として活動した。

戦局の悪化による文部省当局の美術科・創作科の廃止要請に対し、やむなく専門部芸術科は、創作科と宣伝芸術科を合併して宣伝文芸科に、美術科と商工美術科を合併して工作美術科とした。そして1944年には学生募集を停止し、戦時中は芸術教育を工科系の中で担当した。路可の勤務もその頃までと考えられる。

日本画 [上] で記したように、フランスから帰国後の路可は恩師=松岡映丘率いる《新興大和絵会》に所属したが、1931(昭和6)年に同会は解散した。その後1935(昭和10)年東京美術学校を辞した松岡映丘は、同年9月に《新興大和絵会》メンバーを中心に門下を合わせ《国画院》を結成し、当然路可も加盟した。しかしこれも1937(昭和12)年第一回展を開催したのみで、翌年の映丘の死去により展覧会活動を休止、研究団体として存続し、1943(昭和18)年解散した。

そこで路可は美校の同窓だった遠藤教三、狩野光雅と3人で《翔鳥会》を組織し、毎年展覧会を開いたことは先述の通りである。

一方で、《カトリック美術協会》での活動も続けられた。また、《新文展》にも出品している。

戦後、イタリアに出発するまでの目白時代のこれら展覧会の出品作は、ほとんどが日本画である(屏風、絵巻物を含む)。鶴沼時代《新興大和絵会》の出品作にはフレスコの小品を含むが、目白時代はフレスコは壁画に限られるようである。

文筆 長谷川路可は画家にしては珍しいぐらい筆の立つ人物といえよう。

没後、遺族を中心に編まれた路可の記録も「画集」ではなく「画文集」と名付

けられるほど多くの文章が盛り込まれている。

初期の頃はカトリック関係や勤務先の学校関係の冊子へ寄稿するのが中心だったが、1939年には『サンデー毎日』、翌年には『週刊朝日』といった一般向けの週刊誌からも絵と文章を依頼されるようになった。

著作といえるものは、共著を含めて6冊ほどで、いずれも服飾史関係のものである。フレスコ・モザイクに関する技術書のようなものが見あたらないのは不思議だし、残念にも思う。

雑誌や新聞への寄稿は100編を越すと思われ、うち24編が『長谷川路可画文集』に再録されている。主にエッセイだが、その題材は専門の美術、服飾ばかりでなく、映画から食文化まで多岐にわたる。

暗い時代へ 1940(昭和15)年11月22日、東京市療養所に入院していた登茂夫人は、まだまだ幼い3人の愛嬢を残して天に召された。その直前、路可は夫人をモデルに「東京療養所にて」と題するデッサンを描いた。感染を恐れて面会が許されなかった愛嬢のためと思われ、今も遺族が愛蔵している。

一家にとって暗く悲しい日々が続いたと思われる。日本全体も軍国主義とナショナリズムに覆われ、日中戦争は泥沼化し、国際的に孤立した日本は、ドイツ・イタリアと共に枢軸国を形成して第二次世界大戦に突き進んでいく。ことにキリスト教徒にとっては厳しい受難の時代であった。

こうした時代の中で芸術家は、とりわけ国画派の画家は戦意高揚のための制作を余儀なくされた。路可も例外たり得ない。

太平洋戦争開戦前の1941(昭和16)年における第4回《翔鳥会展》の出品作品の題名は、『天国と地獄』[六曲一双屏風]、『肖像』[日本画]、『関八州十二勝景連作』[日本画]等であったものが、翌年の第5回《翔鳥会展》では、『南十字星』／『ミンダナオの朝』／『更紗描き』[日本画]、『椰子樹』[十曲半双]等と、当時「大東亜」戦争と呼ばれたこの戦争が、欧米の植民地として虐げられている東南アジアの人々を解放するための「聖戦」であると国民に信じ込ませようとした軍部の意図に沿うような題材が選ばれている。さらに次の年の第6回《翔鳥会展》の出品作には『^{しこ}醜^{みたて}の御盾』[日本画]という、当時軍部のプロパガンダに好んで利用された万葉集の一節が用いられたりしている。この変化に注目したい。

また、依頼されて制作した作品は、なおのことである。

1942(昭和17)年、『星港陥落記念』と題するフレスコ壁画を描いている。これ

がどこに描かれ、その後どうなったかは判然としない。モノクロームの写真が残るのみである。星港とはシンガポールの中国語表記(新嘉坡、新加坡、星加坡とも)で、日本軍占領後は「昭南島」と命名された。同年2月15日にパーシヴァル率いる英極東軍が陥落したことを記念する壁画である。写真で見る限り南国風の花鳥画を背景として3人の男女が描かれている。戦争の血なまぐさを全く感じさせない平和な情景である。

また同年、東京府養生館国史絵画館のために2作品を描いている。

東京都港区麻布南西部は、その昔南部藩邸があったことから麻布盛岡町と呼ばれていた。旧南部氏邸跡は明治中期から有栖川宮邸地となり、その後高松宮家所有地となったが、東京市に下賜され、大部分が有栖川宮記念公園となり、北部は東京府の少国民精神修養道場=養正館となった。戦後は公園地はそのままだが、養正館の地は都立教育研究所、テニスコート、区営運動場などになった。1933(昭和8)年の皇太子(今上天皇)生誕を記念して多くの画家により、日本の歴史を描いた「国史絵画」が制作され、路可も『旭日富嶽圖』[フス壁画]の他、『和氣清麻呂』[日本画]を担当した。養正館は終戦で閉鎖され、『和氣清麻呂』は現在は伊勢神宮の《神宮徴古館》に収蔵されている。

『旭日富嶽圖』は戦後もかなり長期間壁面に残されていたが、『F.M壁画集団』によりストラップされた。しかし、現在に至るも修復されていない。

このような作品は、路可にとって決して唯々諾々と生み出されたものではないと思われる。キリスト教の信仰と時代の風潮の狭間にあって、大きな葛藤の中で心理的合理化が行われた結果であろう。

カトリックの雑誌『声』の1943年10月号に路可は「大東亜戦争とカトリック美術—日本的とカトリック的との結合の問題」と題する一文を寄せている。残念ながら原文を読んでいないが、題名から察するに上述の合理化の過程が当局から睨まれない程度に記されているのではないだろうか。

こうした時代の流れの中で、1942(昭和17)年9月11日、路可は金子ヨシノと再婚する。

そして1944年8月24日、待望の長男に恵まれ、巖と命名された。イエス=キリストは最初の弟子であるシモンをペトロと改名し、地上の全権を託した。新約聖書の原典はギリシャ語で書かれたが、ペトロとはギリシャ語で岩を意味する。このことから巖という名は、日本のクリスチャンが好んでつける名である。

1945(昭和20)年になると、完全に制空権を失った日本本土は、米軍機の来襲に

脅かされるようになった。4月13日の空襲では、目白界限では徳川邸の樹林が類焼を防いだけでなく、町内会の防空体制に普段は積極的でなかった路可が、逆に独り家に留まり近隣に落下した焼夷弾を消火して隣組の人々から見直され感謝もされた逸話が残っている。

目白の家は奇跡的に被災から免れたが、路可は5月にヨシノ夫人の実家のある山形に疎開した。目白に戻ったのは敗戦後の9月である。

カトリック画家として 敗戦は日本人にとって、極度の物資不足、未曾有のインフレーションといった経済上の混乱もさることながら、精神面でも180度転換を迫るものであった。書店では新しい価値観を求めて「共産党宣言」と「聖書」が飛ぶように売れたという。国外追放されていた外国人聖職者も次々に戻ってきたし、新しい宣教師も送り込まれ、各地で伝道活動や教会の設立も進められた。

戦後5年間の長谷川路可の活動を見ると、《文化服装学院》での教壇生活に加えて1946(昭和21)年4月から《惠泉女学園高等部》に勤務、服飾史を担当している。また、『服装の美学 デザインの仕方』(東京生活社1947年)と『図解服装史』(草美社1948年)を刊行した。

この時期の路可の作品は壁画のような大型のものは見あたらず。日本画に限られる。しかもその題材はほとんどがカトリックに関連する。GHQの指導により、時代劇映画の制作が禁止されるような時代だったから、国画派が得意とする歴史画は制限を受けていたのかも知れない。

1946年には第8回《カトリック美術協会展》に『降誕』[日本画]、『受胎告知』[日本画]を出品した他、カトリック片瀬教会のために『聖家族』[日本画]を制作した。この作品は現在も同教会の祭壇右側の床の間に常掲されている。

1947年の第9回《カトリック美術協会展》には『踏絵』[日本画]、『高山右近』[日本画]を出品している。

第10回《カトリック美術協会展》は1年おいた1949年に開催された。路可はこれに『受胎告知』[日本画]、『細川ガラシア』[日本画]、『長崎のアンジェラス』[日本画]を出品した。

《新文展》は戦後《日展》と名を変えて再出発した。1949年の第5回《日展》に路可は『聖母子』[日本画]を出品している。

1908(明治41)年に建てられた日本最初の本格的な石造りの《鹿児島カテドラル・ザビエル記念聖堂》は、1945年4月8日、ミサの直後空襲のため焼失した。こ

の聖堂が1949年にザビエル渡来400年を記念して木造で再建されるのに際し、壁画として『臨終の聖フランシスコ=ザビエル』／『少女ベルナデッタに御出現のルルドのマリア』／『聖ザビエル日本布教図』という3点の日本画を制作した。

この木造聖堂は、その後50年の星霜に耐え、1999(平成11)年ザビエル日本渡来450年を記念し、近代的なコンクリート聖堂に建て替えられた。現在、路可の3点の日本画は、この新しい聖堂の壁面を飾っている。

このように、戦後の5年間は徹底してカトリックを題材にした日本画を描き続けた路可だが、記録で知り得る唯一の例外がある。

それは1950(昭和25)年、母=長谷川たかの13回忌に際して墓所の夢想山本眞寺の本堂、本尊後部の板壁背部に『歩む釈迦像』[水墨板絵]を描いたことである。

岩山の坂道を下る釈迦の姿をリアルに描いたものだが、一見して仏教絵画という印象を与えない。頭の上に光輪でもあれば、そのままキリスト教絵画といえそうな雰囲気を持っている。半世紀を過ぎた今、だいぶ色もあせてきている。

また、これとは別に掛け軸とスイスの風景を描いた扇面を寺に奉納している。

この間、1948年2月13日次男が誕生、雅号の1字を採り路夫と名付けた。

1947(昭和22)年に学校教育法が施行されて、いわゆる六三制の単線型学校体系に統一された。1950年には、短期大学が開学することになるが、財団法人並木学園でも《文化服装学院》に加えて《文化女子短期大学》(1964年《文化女子大学短期大学部》となる)を開学し、「服装科」を設置した。この短大開学にあたり、初代学長に徳川義親を招聘するなど、長谷川路可の功績は並々ならぬものがあったと、当時の学園関係者は語っている。

イタリアへ カトリック独特の風習に「聖年」というのがある。ローマ巡礼者に特別の赦しを与える、とした年である。

1950年の聖年にあたり、描き上げたばかりの『切支丹絵巻』[3巻、日本画]を携えた路可は、サイゴン経由でヨーロッパへ向かうフランス船の船客となった。

マルセイユに到着すると、途中ニースのHenri Matisse^{アンリ マティス}のアトリエを訪問し、ローマに向かった。(この頃旧友=裕伊之助がマティス邸に滞在していた)

イタリアに到着した路可はヴァチカンを訪れ、教皇=Pius XII^{ピウス 12世}(在位:1939-1958)に拝謁、『切支丹絵巻』を献呈することができた。

この時路可はヴァチカン駐在の金山政英代理公使(1909-1997)に面会し、彼から重要な任務を依頼された。「ローマの外港であるチヴィタヴェッキアある《日

本聖殉教者教会》が改修されるのに際し、その内装を引き受けてもらえまいか」というのである。この依頼が路可の出発前から打診されていたのか、それともヴァチカンを訪れてから急に依頼されたのかについては諸説がある。

金山政英は、カトリック信徒の外交官として1941年3月(当時は参事官)から1952年6月までの11年間に家族と共にヴァチカンで過ごした。この間、ローマ教皇を通じて終戦工作に努めたり、イタリアを訪問する日本の財界人があれば、手厚く遇した。後に韓国大使を務め、日韓関係の修復のために尽くした。

カトリックの信徒であった彼は、路可の業績についても周知しており、また、交渉に説得力があった。

この依頼がなされたのは1951年1月といわれている。路可は快諾を即答したのか、あるいは逡巡の末承諾したのかは詳らかでないが、いずれにせよそのままローマに滞在し、2月から構想に取りかかった。そして7月にはチヴィタヴェッキアのフランシスコ会修道院に起居するようになり、8月に聖壇後陣正面のフレスコ壁画制作に着手したのである。

日本聖殉教者　ここで、カトリック信徒以外には耳慣れない「日本聖殉教者」あるいは「二十六聖人」について、また、その記念聖堂がなぜチヴィタヴェッキアという港町にあるのかについて若干の説明を加える必要があろう。

キリスト教は1549(天文18)年、反宗教改革を推進したイエズス会の宣教師=フランシスコ=ザビエルによって日本にもたらされた。戦国乱世の時代である。

ザビエルは戦国時代の日本をよく理解し、まず各地の戦国大名たちに領内での布教の許可を求め、円滑に布教を進めるために大名自身に対する布教も行った。後続の宣教師たちもこれに倣ったため、大村純忠・大友宗麟をはじめ延べ30人を越す大名が入信した。また、一般人の入信者も続出し、ある研究者の試算によれば最盛期には当時の日本人口の約4%が切支丹(クリスチャンの当時の呼び名)になったという。これは、信教の自由を保障された現在の日本のクリスチャンが、1%前後に過ぎないことを考え合わせると、驚異的な数字といえる。

これに脅威を感じた豊臣秀吉は、1587(天正15)年に「伴天連追放令」^{ばてれん}を發布し、キリスト教布教を弾圧した。この「伴天連追放令」の対象は宣教活動や大名の活動で、一般信徒の信仰を縛るものではなかった。また、鎖国ではなく、対外貿易などの商業活動はむしろ奨励された。イエズス会側も表だった宣教活動を控えた。

秀吉は朝鮮出兵に相前後して周辺アジア各国に対しても服属を要求する使節を

派遣した。当時スペイン支配下の呂宋^{ルソン}と呼ばれたフィリピンには1591(天正19)年に原田孫四郎が派遣された。スペインのフィリピン総督はこれに驚き、外交交渉によって問題を解決しようと、3回にわたる使節を日本に派遣した。朝鮮出兵の基地として名護屋城が築かれ、軍勢が集結しているというニュースは、呂宋にも伝わっていたのである。

この2回目の使節団に同行したのがフランシスコ会の宣教師ペトロ＝パウチスタ神父である。彼はフィリピン総督の返答を待つ間、人質として日本に滞留することを秀吉に願い許可される。「伴天連追放令」の事情をわきまえない彼は、熱心に宣教活動を行い、その結果多くの日本人信徒が生まれた。

1596(文禄5)年10月19日、フィリピンのカビテ港を出港してメキシコに向かうスペイン船サン＝フェリペ号が折からの台風に押し流されて土佐の浦戸に漂着した。この事件が二十六聖人殉教の引き金になったと日本キリシタン史研究者＝片岡千鶴子(1937-)純心女子大学学長は指摘している。

それには二つの理由が考えられると片岡氏は分析する。一つはこの事件の報告を受けた秀吉は、五奉行の一人である増田長盛を土佐に派遣して積み荷の没収を謀った。調査の段階で長盛は同船の航海士からスペインの植民地支配の方法を聞き出し、先ず宣教師を派遣して改宗させ、その後、侵入して武力で国を奪うという答えを秀吉に伝えたというものである。もう一つは、積み荷の没収を正当化するためにサン＝フェリペ号が日本の法「伴天連追放令」に背いていたという理由を主張した。これは同船に7人の修道士が便乗していたのを指していた。そして同時に「伴天連追放令」が実際に施行されているという証拠として、国内のキリシタンの捕縛が命令されたというものである。

いずれにせよ、1596(10月末から慶長に改元)年12月8日に秀吉は再び禁教令を公布した。そして、フランシスコ会の活発な活動が禁教令に対して挑発的であると考え、京都奉行の石田三成に命じて、京都に住むフランシスコ会員とキリスト教徒全員を捕縛して処刑するよう命じたのである。

石田三成は、京都及び大阪で先述のペトロ＝パウチスタ神父をはじめとするフランシスコ会の外国人司祭・修道士6人と日本人(父親が中国人という1人、朝鮮出兵の時に連行され、帰化した朝鮮人3人を含む)信徒15人、イエズス会信徒3人の24人を捕縛し、堀川通り一条戻り橋で左の耳を切り落とし、市中引き回しの上、長崎に連行した。その途中、世話のために同行した2人も自ら進んで捕らえられ、計26人が1597(慶長2)年2月5日、長崎西坂の丘(現在のJR長崎駅前)

の刑場で十字架刑に処せられたのである。その模様は多くの見物人によって見届けられ、数々のエピソードが残されている。また、イエズス会宣教師^{ルイス フロイス}Luis Frois (1532-1597) によってヨーロッパへもつづさに伝えられた。

彼らの遺骸は死後、多くの人の手で分けられ、日本で最初の殉教者の遺骸として世界各地に送られて崇敬を受けたという。

関ヶ原の戦いを経て、徳川家康が1603(慶長8)年に江戸幕府を開く。同年フランススコ会宣教師^{ルイス ソテロ}=Luis Sotelo がフィリピン総督の書簡を携えて来日し家康や秀忠に謁見、日本での布教を開始した。その後仙台藩主^{だて まさむね}=伊達政宗との知遇を得、東北にも布教するが、1612(慶長17)年には幕領で、翌年には日本全土に禁教令が出され、ソテロも捕縛される。しかし、政宗の助命嘆願によって赦された。

1613(慶長18)年9月15日(旧10月28日)、伊達政宗の命を受け、ソテロを正使、^{はせくらつねなが}支倉常長を副使とする通商交渉を目的とする遣欧使節団が派遣される。一行はメキシコ、スペインを経由して1615(元和元)年10月18日(旧8月26日)、イタリアのチヴィタヴェッキア港に上陸し、ローマに向かった。

すなわちチヴィタヴェッキアは、遣欧使節団が初めてイタリアに足跡を印した地なのである。

これが縁で、遣欧使節団出発地である宮城県石巻市とチヴィタヴェッキア市は1971(昭和46)年10月12日、姉妹都市関係を締結し、仙台に古くからあった支倉常長像がイタリア美術監督局の手で修復された。1993(平成5)年6月、チヴィタヴェッキアに支倉常長の銅像と併せて遣欧使節団の航路図碑が建てられている。

常長は1620(元和6)年8月24日に帰国。通商交渉の失敗を報告し、政宗はその日の内に領内でのキリシタン禁止に踏み切った。

江戸幕府も1624(寛永元)年のスペインとの国交を断絶、来航を禁止したのを手始めに次々に鎖国令を出した。しかしこれは、カトリック国であるスペイン・ポルトガルを排除するのが目的で、プロテスタント国である英国(相手側が平戸商館を閉鎖して引き上げ)・オランダとは通商を続けたし、近隣の中国(明→清)・朝鮮・琉球・蝦夷との交易も行われていたから完全な鎖国ではない。

1637～1638年の島原の乱を経て切支丹弾圧は強化され、以来表立ったキリスト教徒の活動は見られなくなっていった。

1853(嘉永6)年、黒船が浦賀に来航して翌年には日米和親条約が締結された。そして、1858(安政5)年の日米修好通商条約の締結によって200年を超える鎖国は幕を閉じたのである。

日本が開国して間もない1862(文久2)年6月8日、教皇=Pius IX^{ピウス 9}世は、1597(慶長2)年2月5日、長崎西坂の十字架上で殉教した26人を聖人に列した(列聖という)のである。

そして、支倉常長ゆかりのチヴィタヴェッキアにあるフランシスコ会修道院の聖堂を《日本聖殉教者教会 (CHIESA DEI SANTI MARTIRI GIAPPONESI)》と名付けて改修し、1864年に献堂した。

この時の改修は、現地の職人の手で行われた。26聖人の姿が描かれていたというが、開国後間もない日本の状況はまだイタリアには届いていなかったためか、風体や服装は中国人とほとんど変わらない無国籍のものだったという。ここを訪れた日本人は、これを見て落胆した。金山政英もその一人だったであろう。

第二次世界大戦の時、チヴィタヴェッキア港はナチス=ドイツの潜水艦基地になった。大戦末期、連合軍の艦砲射撃を受けて市街は徹底的に破壊された。港に面する《日本聖殉教者教会》の建物も勿論例外ではなかった。

戦後の混乱がようやく収まりかけた1950(昭和25)年、聖堂復興が話し合われた。そこへたまたま日本を代表するカトリックのフレスコ画家=長谷川路可が聖年を機に訪れたのである。金山代理公使は天の配剤と喜んだに違いない。

壁画制作 1951(昭和26)年8月からフレスコ壁画の制作が始められた。聖堂正面最奥部の半円形の平面を持つ後陣^{アプス}の高さ5mの壁面を3つに区切り、先ず中央の壁面から取りかかった。漆喰塗装のために櫓が組まれ、塗装は現地の左官に手伝わせたが画面は路可一人で描いた。中央壁面は真ん中に聖ペトロ・パウチスタ神父の十字架が正面を向いてひときわ大きく描かれ、右側には最年少の12歳で殉教した聖ルドビコ茨木少年が十字架上で安らかな顔で目を閉じている。左側は殉教者たちの指導者であった聖フランシスコ・ブランコ(スペイン出身の若い神父)の十字架が3人の執行人によって立てられつつある様子が描かれている。

この中央壁面が完成したのは12月といわれる。

中央の左右両隣は刑場の様子がほぼシンメトリーの構図で描かれているから、後陣から先に描かれたと思われる。

先ず右側は、上部にすでに立てられた5本の十字架上に左から聖パウロ鈴木、聖パウロ三木、聖ガブリエル、聖フランシスコ(医師)、聖ディエゴ喜斉といういずれも日本人の殉教者が左、すなわち中央に顔を向けている。名前のカタカナは洗礼名である。いずれも白い和装で描かれているが、刑衣なのであろう。内側3

面の刑場の画面では、日本人殉教者は白衣、外国人聖職者は茶色がかった灰色の丸首の衣服を着ている。

右画面の下部には、右にまだ地面に横たえられている十字架に聖ゴンザロ・ガルシアというインド出身の修道士がまさに縛り付けられようとしている。左には聖マルチノ・デ・ラ・アセンシオンというスペイン人の神父が十字架の脇に立たされており、3人の執行人が作業をしている姿が描かれている。

中央左側の画面は、右側と同じく上部にすでに立てられた5本の十字架があり、左から聖コスメ竹屋、聖ヨハネ絹屋、聖ヨアキム榊原、聖ヨハネ五島という4人の日本人殉教者と聖フィリッポ・デ・ヘススというメキシコ出身の修道士が右を向いて描かれている。彼の顔は浅黒く、顔つきもメキシコ先住民との混血^{メステイソ}に見える。路可の細かい配慮が窺える。

画面下右側には、横たえられた十字架の脇に跪かされた聖フランシスコ・デ・サン・ミゲルというスペイン人修道士が描かれ、こちらも3人の執行人が描かれている。そのうちの一人はサン・ミゲルの背後から拳を振り上げて殴りかかろうとしている。

この画面で興味深いのは、画面左下に5人の女性が刑の様子を見守っている姿が描かれていることである。

内陣両側の壁面は向かい合う平行面で、刑場ではなく、連行される途中のエピソードが描かれている。

先ず右側は現在の岡山市にあたる住吉在枝川の堤の茶店の脇のシーンである。左側に荷車の上に縛られた4人の人物が描かれている。左から聖ミカエル小崎、聖ボナベントウラ、聖トマス小崎、聖レオン鳥丸である。4人とも白衣を着せられている。中央の紺色の作業着を着た人物が聖フランシスコ吉で、京都の大工。長崎に曳かれて行く途中の切支丹の後を追いかけて、自分も仲間に加えて欲しいと嘆願する。その様子を見る5人の男女も描かれている。

左側の壁面は上部に中国船の浮かぶ海面が描かれ、岸には家並みが見られる。^{そのど}彼杵の浦(現在の長崎県東彼杵町)であろう。京都大阪を1月9日に発ち、極寒の中約850kmを歩かされ、手を縛られたまま、この彼杵の浦から三艘の船に乗り、最期の地長崎へ向かったのである。家並みの手前に縛られた4人が小さめに描かれている。左から聖マチアス、聖パウロ茨木、聖ペトロ助四郎、聖トマス(談義者)である。手前には右手を陣笠をかぶった武士に掴まれた縋柄の服を着た少年が描かれている。少年の左手は天を指さしている。「信仰を捨てて俺の小姓になれ」

と言われた彼は、天を指し、「地上において出世するよりも、天上において天主に仕えることこそ望むもの」といって殉教したというエピソードに基づくものである。13歳の中国系少年聖アントニオとされているが、実はこのエピソードは聖ルドビコの話だということが後に片岡瑠美子氏の指摘で判明した。路可の勘違いということになる。左には立派な白馬に跨った武士の後ろ姿の他、7人の陣笠姿の武士が見られる。そして、左手前には正面を向いて合掌する長谷川路可の自画像が描かれている。これがサイン代わりであり、ルネサンス絵画に見られた風習という。

1954(昭和29)年2月には祭壇後ろの5画面が完了し、次に聖壇の天井画にかかった。

天井は後陣が半ドーム型、内陣がアーチ型をなし、全体に鮮やかなコバルトブルーが背景に塗られている。内陣と後陣の境界は、薄青色の2種類の家紋が交互に描かれた白い2本の帯で区切られている。家紋は久留子紋と伊達政宗が豊臣秀吉から賜った桐紋である。

後陣の半ドームの正面には、桃山時代の正装をした聖母マリアが、右手の指を天に向け、左手で鳩を抱えた袴姿の幼子イエスを抱いた聖母子立像で、極めて清楚な印象を与える。

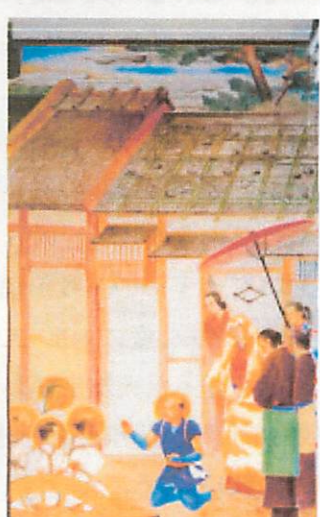
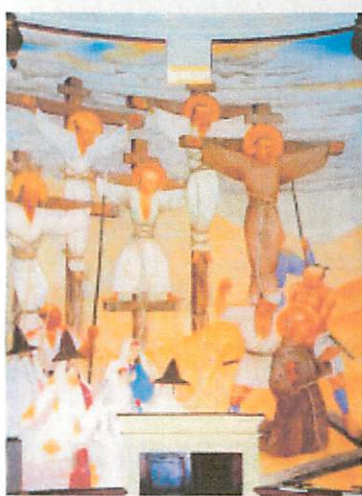
聖母子像の左右には、少し離れて聖人の立像が描かれている。左は日本にキリスト教を伝えたイエズス会の聖フランシスコ＝ザビエル、右はフランシスコ会の創始者、アッシジの聖フランシスコである。

ドームの頂点近くには三位一体を表す三角形の中に中心＝神を表す眼が描かれている。これを「天の眼」という。

内陣のアーチ型の天井には、両袖に立像が描かれている。右側がチヴィタヴェッキアの守護聖人、聖フェルミナ、左側が慶長遣欧使節団の副使としてチヴィタヴェッキアに初めて足跡を残した日本人、支倉常長である。

後陣の天井と壁面の境界部は金色の正方形の板が帯状に並べられており、正面には「日本聖殉教者」の6文字の漢字が右横書きで書かれている。その両側には左右に3つずつの家紋が描かれている。左から瓜葉(少年使節を送った大村純忠の大村家の紋、庵に木瓜(二十六聖人の一人伊東マンショの伊東家の紋)、杏葉(少年使節を送った大友宗麟の大友家の紋、細川九曜(細川ガラシャの細川家の紋)、有馬立ち沢潟(少年使節を送った有馬晴信の有馬家の紋、久留子(切支丹大名の島津家の紋)である。

《日本聖殉教者教会 (CHIESA DEI SANTI MARTIRI GIAPPONESI)》聖壇壁画



チヴィタヴェッキアでの生活 路可のイタリア滞在は足かけ8年に及ぶ。この間、留守宅の生活はどうであったか。3か月の予定の渡伊が何年かかるか判らない長期滞在になってしまったのである。時は戦後の経済混乱が続いていた。日本人全体が飢えていた時代である。路可の勤務先、文化服装学院の対応は寛大だった。イタリアはファッションの先進国である。いわば突然の長期欠勤となった路可を学院の発行する『装苑』、『すみれ』の特派記者という扱いで、定期的に記事を送稿することを条件に、留守宅に給料を届けたのである。

こうして、とりあえず後顧の憂いなく壁画制作に没頭することができた路可だが、なにしろ清貧を重んじる修道院の中の生活である。

「朝は未明の鐘とともに起き、スパゲッティの繰り返される貧しい食卓に長い祈りの後のイタリア語の談話に耐え、心おきなく語り合う友人もないただひとりの日本人として、この長い期間を身にしみて異郷にある思いをした。」(朝日新聞昭和32年9月15日)と路可は述懐している。

路可が壁画制作に取りかかって間もない1951(昭和26)年9月8日にサンフランシスコで署名された「日本国との平和条約」(翌年4月28日発効)により、敗戦国日本は独立国として国際社会に復帰した。「朝鮮特需」をきっかけに工業の復興もめざましかったが、まだまだ経済力は乏しく、海外旅行も自由化されていなかったし、1ドル=360円の固定相場制の時代だった。従ってローマに在住している邦人は数少なかった。それだけに在留邦人間の関係は緊密で、結束は固かったという。彼らの集まりがあると、チヴィタヴェッキアを抜け出してローマに向かった。たまには旨い料理でも食わないと身が持たない。

修道院に起居しているのだから、最低限の寝食は保証されているが、それ以上の生活のゆとりは全くない。

最も大変だったのは経済的な問題である。聖堂修復の費用は、基本的にはフランススコ会が負担しただろうし、約6,000人という信徒の献金もあったと思われるが、路可の理想とする壁画制作のための画材などは最良のものを求めてフランスから取り寄せるなど、当初の予想を遙かに上回ったようだ。

路可はそれを少しでも補おうと、イタリアを訪れる邦人の観光ガイドを引き受けてアルバイトしたりもした。また彼らをチヴィタヴェッキアの実作現場に案内して、実情を訴えた。こうして多くの人々が路可の仕事を実際に見て感動し、芳名録代わりになっていた下絵にサインを残している(後述)。

中でも石橋正二郎(1889-1976 プリヂストンタイヤ創業者。「石橋コレクション

ン」で知られる美術愛好家)は、ブリヂストン美術館のためにポンペイ壁画の模写を依頼した代償に多額の寄付をした。

これらの模写作品は、《石橋美術館》・《ブリヂストン美術館》に分けて収蔵され、《ブリヂストン美術館》の4作品は、現在館内のティールーム《ジョルジュット》に常掲されている。

また、澁澤敬三(1896-1963 澁澤榮一の孫。戦前は日銀総裁、戦後は幣原内閣^{してはら}の大蔵大臣となり、戦後インフレの収束にあたった。公職追放を受けたが、解除後は国際電信電話(現KDDI)社長、文化放送会長などを歴任するとともに、財界の世話役として活躍した)は帰国後「長谷川路可に金を送る会」を開催し、多くの財界人の賛同を得た。イタリアへの送金的一方、留守宅への配慮も忘れなかったという。

イタリアでの交流 この時期、日本もイタリアも敗戦の痛手から立ち直る努力をしていた。ことに文化面での活動としては、映画界の進展がめざましく、イタリアでは〈ネオレアリズモ〉の名作が次々に生まれたし、日本では黒澤 明の『羅生門』が1951年のヴェネツィア国際映画祭《金獅子賞》^{グランプリ}を受賞し、国際的評価を受けるようになった。

その試写会がローマで開かれた時、名監督=Vittorio de SICA(1901-1974)と隣席になり、話を交わしたことをきっかけにイタリア映画人との交流が深まった。

Robert ROSSERINI(1906-1977)監督と彼を頼って渡伊したIngrid BERGMAN(1915-1982)を、彫刻家イサム・ノグチと結婚したばかりの山口淑子(李香蘭 1920-)とともに訪れたり、チヴィタヴェッキアからほど近いところに居住していたバーグマンから時折パーティーに招かれるなど、その後も交流の機会があった。

日本からも、1954年9月26日、映画女優=香川京子が切支丹を扱う次回作『青銅の基督』の相談のために渋谷 実監督の紹介で路可の許を訪れ、面談した。

イタリア美術界との交流も行われた。どういうわけか、彫刻家との交流が目立ち、Pericle FAZZINI(1913-1987)やEmilio GRECO(1913-1995)などとの親交は生涯続けられた。ファッツィーニとグレコは仲が悪く、路可は交際にかなり気を使っていたらしい。

チヴィタヴェッキアの作業場の足許には下絵が置かれていて、これが今日遺族の許に遺されている。これを見ると、おびただしいサインが書き込まれている。作業場を訪れた見学者の署名である。すなわち、下絵が芳名録になっていたわけ

だ。漢字で書かれた日本人の名だけを拾い上げてみると、200名を越す。これ以外に60名ほどの横文字のサインが見られるが、筆記体で判読困難なものが多い。

名前をみただけで「ああ、あの人も」とわかるケースが少なくなく、そうでなくともインターネット検索などで判明する人が大多数であることに驚かされる。

カトリック関係者が多いのは当然だが、外交官、政財界人、学者、ジャーナリスト、芸術家などなど、多士済々である。ことに、この時代に活躍した美術評論家が揃っているのはさすがだ。著名な人々を列挙してみよう。

日付が判読できる中で最も早いものは1951年5月5日の黒川武雄厚生大臣のもので「献身 ローマ金山邸に於て」の記載があり、この下絵が完成して間もない頃と思われる。次いで1951年8月5日、金山政英代理公使夫妻をはじめ7人が列記してある。中に池島信平(1909-1973 文藝春秋新社)の名も見える。カトリック関係者としてまとまって訪れた例としては1956年1月5日という日付で6人列記してある。次いで同年1月26日にも3人がカンツォーネ歌手の荒井基裕夫妻とともに記されている。この中には濱尾文郎(1930-2007)という名が見える。当時は横浜司教区司教だったはずで、後に2003年には日本人で5人目の枢機卿となり、2005年の教皇選出会議にも参加したが、昨年(2013年)の11月8日に帰天した。その他を含めるとカトリック関係者の名は21人判読できる。

1951年8月17日には古垣鉄郎会長をはじめとするNHK関係者が4人訪れている。NHKでは他に1954年に藤倉修一、1957年に桜井 健両アナウンサーの名が見える。壁画制作が端緒についた頃、日本の民放各社もスタートしたが、民放関係者の名は見あたらない。他にジャーナリストとしては山崎 功(読売)、渡辺善一郎(毎日)、阿部徹雄(サン写真)の3記者が1952年の別々の日に訪れている。

美術関係者では、画家の佐藤 敬、益田義信、神原 泰、宮本三郎夫妻、島田精治、田淵安一、宮田重雄、田村孝之介夫妻、藤川栄子、中西康子、中川一政夫妻、寺田春 式、別府貫一郎の他に服飾デザイナーの田中千代、写真家の田村 豊夫妻の名が見え、評論家・研究者としては船戸 洪、土方定一、柳 宗玄、矢代幸雄、三輪福松という顔触れが見られる。中川一政とはヴェネツィアに遊び、これが縁で後に路可の弟子たちを《春陽会》に紹介したと一政は語っている。

案外多いと思われるのが文学関係だ。田村泰次郎、庄野英二、石川達三夫妻、芹澤光治良、平林たい子、藤浦 洸、林 謙一、川口松太郎の面々である。

川口松太郎は1953年9月7日に夫人の三益愛子、溝口健二、田中絹代、川喜多長政、清水千代太、依田義賢と共に訪れている。日付と顔触れから判断すると、

『雨月物語』がヴェネツィア映画祭で《銀獅子賞》を受賞した時に違いない。

集団で訪れた例としては、1954年8月8日に喜多 実をはじめ12人の能楽関係者が見られる。ヴェネツィアのヴィエンナーレ演劇祭に参加した折で、この公演は能楽の海外初公演だった。

経済人としては、先述の石橋正二郎、澁澤敬三の他に繊維関係の企業が目立つ。当時の日本は糸偏景気に湧いていたし、イタリアは繊維産業の中心地だった。

その他の著名人としては谷川徹三、湯川秀樹博士夫妻と徳川夢聲夫妻が目立つ。夢聲は『週刊朝日』の《問答有用》で路可と対談するために訪伊したのだ。

これらの人々が孤軍奮闘する路可の姿を目の当たりにし、感動し、異口同音に褒め称えている。これほど制作現場を公開した画家は希有であろう。

壁画完成 1954年10月に後陣、内陣の殉教図と天井画が一応終了した。この段階でコンスタンティーニ枢機卿を迎えて、壁画完成の祝別式が開催され、チヴィタヴェッキア市名誉市民に列せられたのである。

殉教画とはいえ、流血シーンは描かれていない。路可は語る。「ぼくの絵では、ヤリをもったり、刀を抜き身にしたりしてるけれども、わき腹を突いたり、首を打ったりしてるところをかかないのは、血なまぐさい感じを出したくなかったからです。教えのために命を捨てることは、よろこびであり感激のいたりであるという気持ちを、画面にあらわしたくって、暗い色を使わなかったんです。」

次は礼拝室両側にそれぞれ3箇所ずつ設けられている壁龕^{へきがん}の壁画に取りかかった。壁龕の上部はアーチ型になっており、右壁面は聖像の立つ小聖壇を持つ。

内陣に向かって左側の壁面は、右から二大使徒の聖ペトロと聖パウロ、幼いキリストを抱く聖ヨゼフ、アッシジの聖フランシスコが描かれており、右側の壁面は、左から聖処女マリアの像の背景にマリアを讃美する天使と花々、みこころのキリスト像の背景に王冠・百合の花・シュロの葉・鍵・笏と6人の天使が、幼いキリストを抱く聖アントニオ像の周囲に3面の彼にまつわるエピソードが描かれている。

さらには石橋正二郎と約束のヴァチカン美術界所蔵のポンペイ壁画やいくつかの名作を模写し、続いて教皇庁立ウルバノ大学(ローマ)でフレスコ壁画『聖ザヴェリオ』三部作を完成させた。

ここで一応のけりをつけ、1957(昭和32)年8月、聖堂天井画は未完成のまま、大好きな飛行機で帰国することになる。〔つづく〕 (わたなべ りょう)

内藤千代子と鵠沼

嵯峨景子（東京大学大学院）

はじめに

明治以降別荘地そして保養地として開拓された神奈川県鵠沼は、相模湾を臨む風光明媚な海岸地帯として、また芥川龍之介や岸田劉生をはじめさまざまな文士・文化人が逗留した土地として知られている。その中心は明治25年に開業した旅館「東屋」であり、斎藤緑雨をはじめ志賀直哉、武林無想庵など多数の作家が逗留し執筆活動を行った場所であった。東屋は明治から昭和に至るまで著名な文士文人が集まるサロンのような存在であり、「白樺」発祥の地として、また人々を引き合わせ数多のドラマを生み出した場所として、鵠沼は日本近代文学史においても特異な位置を占めている。そんな鵠沼に、内藤千代子（1893-1925）という作家が暮らしていたことを、今では知る人はほとんどいない。

東京下谷生まれの千代子は幼少の頃家族とともに鵠沼に移り住み、以後大正14年に31歳で没するまでその長からぬ生涯を鵠沼で過ごした人である。千代子は一度も学校教育を受けることなく育ったが、雑誌の投書を通じて名声を高め、若くして博文館から著作を出版するなど早熟の天才として騒がれた。モダンで新鮮な口語体を用い、学生風俗や男女交際など当時の最先端をゆくモチーフを織り込んだ千代子の作品は、明治末から大正初期にかけて一大センセーションを巻き起こし、世の青年男女を熱狂させたのである。また特異な経歴も相俟って、作品ばかりではなく千代子本人に対しても読者やメディアの関心が高く、さまざまな報道がなされたことも作品と並ぶ千代子人気の特徴の一つである。

しかし流行作家として名高かった千代子は今では完全に忘れ去られ、近代文学の領域においても言及されることはほとんどない。また爆発的な売れゆきで増刷を繰り返した著作も現存するものは非常に少なく、国会図書館においてもすべての本は所蔵されていない。現状においては、千代子の作品を読むことすら非常に困難を伴う状況なのである。一体なぜ、あれほど人気が高かった千代子の存在は忘れられてしまったのであろうか。作品もほとんど残っていないのであろうか。千代子の忘却は、彼女を巡る最も大きな謎と言えるかもしれない。

筆者がなぜこの忘れられた作家内藤千代子の存在を知り、研究を志すようにな

ったのか、その出会いのエピソードを紹介しよう。大学院で社会学を専攻していた私は、修士論文の素材として博文館から出版されていた婦人雑誌『女学世界』を選び、読者欄分析を行った。この『女学世界』こそが、まさに千代子の活躍の舞台となっていた雑誌だったのである。読者欄に掲載されている投書を一つ一つ読み、それを分析するという作業を行っていた私は、読者欄に「内藤千代子」という聞き慣れない人物名が頻出していることに気がついた。「一体この人は誰なのだろう」と不思議に思い調べていくうちに、内藤千代子が『女学世界』の投書から出発し、この雑誌を中心に活躍した流行作家であったこと、また非常に特異な経歴を持つ人物であることを知ったのである。このように内藤千代子との出会いは偶然であり、また彼女の存在は私の『女学世界』研究における思いがけない発見でもあった。結果的に忘れられた作家である内藤千代子という非常に興味深い人物に惹かれ、引き続き大学院で彼女の研究に取り組むことにしたのである。現在は内藤千代子に関する博士論文を執筆すべく、大学院において研究に励んでいる次第である。

本稿では鵠沼にゆかりの深い、しかし今となっては忘れられてしまった内藤千代子をテーマに、千代子の生涯そして千代子と鵠沼に関わるエピソードなど、千代子と鵠沼をキーワードに紹介することを目的とする。内藤千代子の人物研究としては森山敬子氏による論文「女学世界に咲いた花-内藤千代子について-」があり、森山氏の丹念な調査により千代子の生涯と作家としての活動が掘り起こされている。こうした成果をふまえ、本稿では千代子と鵠沼の関わりに重点を置くことにする。千代子は作品の中で鵠沼を描き、またそれが作品の魅力ともなっていた、鵠沼を描いた作家なのである。現在鵠沼に暮らす方々に、鵠沼文人の草分け的存在である内藤千代子について、またその作品について知ってもらおうきっかけとなることを願いつつ、本稿を進めていくことにしよう。

内藤千代子の生い立ち

内藤千代子は明治26年12月9日、父広蔵、母いくの長女として東京下谷に生まれた。明治29年、千代子が満三歳の時に一家は鵠沼に移住する。移り住んだ家は知人の別荘で、周囲は見渡す限りの原っぱであったという。以後農家の離れ、そして千代子が8歳の時に新築の自宅へ引っ越しと家を移り変わりつつ、31歳の生涯を閉じるまで一時的な上京をのぞき生涯を鵠沼で過ごしたのであった。

千代子は大正3年、21歳の時に自伝『生ひ立ちの記』を出版している。この本

を紐解くと、幼年時代の回想とともに千代子が育った時代の鵠沼の姿が描き込まれている。『生ひ立ちの記』は千代子の個人史を知る証言としてばかりではなく、開発以前の鵠沼の風土や当時の風俗を知る資料としても興味深い存在と言えよう。

図1：内藤千代子（出典『生ひ立ちの記』）



『生ひ立ちの記』には写真が八葉おさめられているが、これはその中の一枚である。収録されている写真には残念ながらキャプションがついていないが、おそらく千代子の自宅で撮影されたものと思われる。一緒に写っているのは、明治31年に生まれた妹のかめ、そして千代子の母ではないだろうか。自伝の中に多数挿入された写真は千代子の姿ばかりではなく、鵠沼という土地のイメージをも読者の目に伝えていたのであろう。のちに詳しく紹介するが、読者の中で千代子の名前と鵠沼は深く結びついており、鵠沼は憧れの土地であった。

明治39年7月、千代子が14歳の時に結核を患っていた父が亡くなった。父広蔵は士族出身であり漢学の素養があったが、病弱であり、象牙彫師の仕事をしていた。千代子はこの父の元で家庭教育を受けたため、学校に通うことなく育ったのである。物覚えがよい千代子を手放すことを惜しんだこと、また学校が遠く両

親が通学を心配したことなどが家庭教育を受けさせた理由であった。しかし学校に通えなかったこと、そして女学生になれなかったことは大きな心の傷となったようである。後年文筆活動をはじめた千代子は学校や女学生に対する憧れを、そしてそれが許されなかった自らの切ない心情を幾度も綴っている。また作品の中に頻出する一高や帝大も、学校に対する憧れの別な形のあらわれのようにも感じられるのである。

『女学世界』への登場とその後の活躍

家庭教育を受けて育った千代子は幼少の頃から活字に親しんでおり、『幼年世界』や巖谷小波の日本お伽噺などを読み、金港堂から出ていた雑誌『少女界』も初号以来愛読していたという。そんな千代子が文学を志したきっかけは、のちに彼女が寄稿することになる雑誌『女学世界』の定期増刊号「閨秀文壇」（第5巻第6号、明治38年4月号）であった。この号に掲載された「天才は望んで得るべきものでなく、待つて来べきものでなく、その来たるや百年に一人のみと申しますなれど、その一人にならうと我から奮ひ立つも面白いではございませんか…。語を寄す、天下の女学生諸君、卿等の中に我こそ一つ文壇の女將軍たらんと思し召す方はなきや、我こそ月桂冠を得んと志すお方はございませんか。」という文章こそが、千代子の心を奮い立たせ、彼女を活字の世界へと導いたのである。¹

千代子の文章が初めて『女学世界』に掲載されたのは、第8巻第10号（明治41年8月号）である。短文欄に掲載された「心ゆく夕」が、千代子の『女学世界』デビューとなった。以後第11号「避暑地より」（短文で甲賞受賞）、第13号「栗にそへて」、第14号「或る夜」と短文欄での掲載が続く。そして第15号（明治41年11月号）の定期増刊号「心の日記」に投稿した「田舎住居の處女日記」が懸賞三等に入選し、千代子の名前は一躍注目されるようになった。「何の縁あつてか此の相州の片田舎に十年余り住なれて、花やかな都にあこがれ女学生さん達を羨んで居る妾。まだ恋と言ふ物も知らねば筒井筒振分髪の手しと慕ふべき君も持たぬが、これも亦一興とその日記の一節を左に。」という文章で書き出される「田舎住居の處女日記」は二日間に渡る千代子の生活を描いた作品であり、同じ裁縫塾に通う田内邸で行われたカルタ会の様子を中心に、髪を結ったり化粧をしたり、『女学世界』への投書をしたり、千代子の暮らす鶴沼を舞台に何気ない日常の細々としたシーンが瑞々しい文体で描き出されている。「平々凡々の事を書いてこれほ

¹ 内藤千代子『生ひ立ちの記』、牧民社、1914、61頁

どに読ますは尋常の業にあらず」と評されたこの作品は三等に入選をし、千代子は賞金 10 円を獲得した。以後千代子の活躍は目覚ましく、明治 42 年の第 9 巻には計 7 作品（短文を含む）、明治 43 年第 10 巻には 14 作品、さらに明治 44 年の第 11 巻は計 11 作品と、堰を切ったように『女学世界』に作品が多数掲載されたのであった。また作品数ばかりではなく、定期増刊「嫁にゆく人」（第 9 巻第 15 号、明治 42 年 11 月号）に「嫁にゆかぬ人」（本文タイトルは「嫁がぬ人」）で第二等（賞金三十円）、定期増刊号「マダム振り」（第 10 巻第 2 号、明治 43 年 1 月号）に「燃ゆる思ひ」（本文タイトルは「思出多き函嶺の湖畔」）で第一等（賞金五十円）と入選を重ねた。こうした活躍に対して千代子作品のファンも増え、『女学世界』の読者欄である誌友倶楽部においても千代子に関する投稿の数が目に見えて増えていったのであった。

活躍めざましい千代子は、明治 44 年 9 月、満 17 歳で最初の著作『スキートホーム』を博文館から上梓する。『スキートホーム』は『女学世界』誌上に掲載された作品をまとめた本であり、千代子の魅力が存分に詰まった一冊である。鵠沼を舞台にした作品が多く、鵠沼文学としても大変興味深い本といえよう。『スキートホーム』が非常によい売れ行きだったため、同年 12 月に二冊目の著作『ホネームーン』、さらに大正元年 12 月には三冊目の著作『エンゲージ』が出版されている。誌上における活躍と著作の発売で、『女学世界』内に空前の内藤千代子ブームが巻き起こったのであった。



図 2 は『女学世界』第 12 巻第 9 号（明治 45 年 6 月号）、図 3 は『帝国文学』第

17 巻第 1 号（明治 44 年 11 月号）、図 4 は『青鞥』第 2 巻第 4 号（明治 45 年 4 月号）に掲載された広告である。当時の雑誌を見てみると、千代子が活躍していた『女学世界』はもちろんのこと、さまざまな文芸誌に本の広告が掲載されていることがわかる。広告文自体も面白く非常に興味深い資料であるが、ここでは紙面の関係もあり、典型的なものをいくつか紹介する程度に留めておく。

『女学世界』に掲載された広告には「焼け石に水とは博文館発売の『スキートホーム』『ホネームーン』の二冊が重版する片っ端から売り切れて、亦しても品切れとなる様な状態を古人が見越して予じめ作って置いた言葉と思はれます。近次女流作家も沢山ありますが本書の著者内藤千代子ほどキビタツた文章を書く作家は少ない。彼女ほど異数の歓迎を受けた者は真に一葉女史以来である。（後略）」とある。千代子はポスト樋口一葉として売り出されたようである。

『帝国文学』は帝大文学会の機関誌として発行されていた、かなり堅い文芸誌である。そんな『帝国文学』に内藤千代子の広告が載っていたことを知り、驚く人もいるであろう。千代子は女性からも人気があったが、男性からもまた非常に人気がある人であった。千代子自身も好んで一高帝大を作品に描き、また文通をはじめ学生たちと盛んに交流をしていたようである。こうした事情を考えると、『帝国文学』に広告が掲載されているのは決して不思議なことではなく、まさにニーズに合ったものであると言えよう。

ここで一つ、男性読者による千代子作品の受容例を紹介しよう。その読者とは、ノーベル文学賞受賞者の川端康成である。「ふと内藤千代子のホネームーンやエンゲージで讀むだような、〔大〕男學世と女學生との交際がなつかしいものとして現れる。自分もあ〔こ〕んなに交つてみたいと思ふ〔一度は自由な〕草平氏と明子さんの煤煙がまだ讀まないながら浮ぶ。自分も一度はあんな戀をしてみたいような氣がする。²」千代子の作品に対する感想は、森田草平と平塚明子（らいてう）の心中事件を小説化した煤煙と並んで記されており、男女交際や恋に憧れる川端の心理を浮かび上がらせている。この感想が手帳に記されたのは大正 5 年、川端が旧制中学に在学していた頃である。当時の学生風俗や男女交際を巧みに取り入れた千代子の作品は、若い青年たちからも盛んに読まれていたのであった。

最後に紹介するのは、『青鞥』に掲載された広告である。『青鞥』は説明するまでもないが、明治 44 年 9 月に平塚らいてうを中心に創刊された、女性自身の手によって初めて作り上げられた雑誌である。創刊当初は文芸雑誌としての性格が強

² 川端康成記念会編『川端康成全集補巻一』、新潮社、1984、417-418 頁

かった『青鞥』は、やがて婦人問題や社会問題などに対して積極的な発言を行う場へと変貌を遂げる。『青鞥』は新しい女の集団として世間から激しい非難に晒されつつ、女性解放などさまざまな問題提起を行い、その先進性は現在においても高く評価がなされている。そんな『青鞥』にも、千代子の広告が掲載されていたのである。先に紹介した『女学世界』の広告同様、ユーモラスな文体で増刷が追いつかないほどの売れ行きをみせている『スキートホーム』と『ホネームーン』が描き出されている。

『青鞥』に広告が載っているものの、千代子自身は青鞥社との関わりはない。大正元年11月17日から27日まで大阪毎日新聞に連載された「謎の少女」という記事の中で、千代子は青鞥社の尾竹紅吉と並んで取り上げられている。奇しくも『青鞥』の創刊と『スキートホーム』の出版は同じ明治44年9月である。明治から大正に移り変わる過渡期的時代のなか、文学においては自然主義が台頭し、日露戦争以降の社会状況も変動を見せていた。そんな時代において出現した青鞥社そして内藤千代子は、それぞれ別な文脈においてメディアから非常に注目を浴びた存在であったが、関わりはないまま過ぎてしまったようである。なぜあれほど売れた作家内藤千代子が忘れ去られてしまったのか、それは千代子を巡る最も大きな謎といえるであろう。この問題については現時点では十分な考察は行えないのだが、もし青鞥社となんらかの関わりがあれば、千代子の名はここまで忘却されることはなかったのかもしれない。私にはそう思えてならないのである。現在『青鞥』に関しては分厚い研究の蓄積があり、『『青鞥』人物事典 110人の群像』のように青鞥に関わる人をめぐる詳細な調査も上梓されている。また明治45年3月、博文館より『閨秀小説十二篇』という本が出版されている。この本は小山内薫の妹でありまた劇評家・作家として活躍した岡田八千代(1883-1962)が編集を手がけている。最初にこの本の存在を知った時は、出版時期といい版元といい千代子の作品が載っているのではないかと期待しながら調べてみたものの、名前がなくてがっかりしたことをよく覚えている。それもそのはず、この本は青鞥関係者のアンソロジーであり、与謝野晶子や田村俊子、水野仙子や国木田治子をはじめ、『青鞥』に掲載された小説を纏めた本だったのである。もし千代子が青鞥と何らかの接点を持っていたのなら、彼女の名前は記録され、ここまで名前が忘却されてしまうこともなかったのではあるまいか。しかし現実には千代子の作品は当時も、そして現在においてもいかなる選集にも収録されることはなかった。さまざまな網の目からもれ、千代子の作品は、そして千代子の名は深く埋もれてしま

い、研究もなされないまま忘れ去られてしまったのである。

『生ひ立ちの記』以降の千代子

話を千代子の生涯に戻そう。当初は出版社にあやぶまれながら発行された『スキートホーム』ではあるが空前のヒットを示し、『スキートホーム』ばかりではなく『ホネームーン』『エンゲージ』の三冊は商業的に大成功をおさめた。現在確認しているところでは、『女学世界』第13巻第7号（大正2年5月定期増刊号）には『スキートホーム』25版、『ホネームーン』16版、『エンゲージ』10版の広告が掲載されている。短期間において、ものすごい勢いで増刷を重ねていることがここからもわかるであろう。

図5：河岡潮風（出典『五五の春』）



千代子が若くしてこれほど成功をおさめた背景に、千代子の才能を見抜き、支援した人物がいたことが知られている。その人物の名は河岡潮風（1887-1912）である。河岡潮風は本名英男、明治20年に横浜に生まれ、幼くして父を失い母の女手一つで育てられ、早稲田大学を卒業後明治40年に博文館に入社する。明治41年より押川春浪主筆の『冒険世界』の記者となり、雑誌編集に携わる傍ら『女学世界』などさまざまな雑誌にも寄稿をしていた。『女学世界』誌上で人気を誇っていた千代子に目をつけ、社の反対を押し切り自らが発行者となって冒険的に『スキートホーム』の出版を引き受けたのがこの潮風なのである。千代子と潮風が初

めて対面したのは『スキートホーム』出版後であるが、以後二人は文学における師弟関係として、また恋愛関係としても世間の注目を集めた。しかし潮風は明治45年7月、脳膜炎を併発し25歳の若さで亡くなっている。潮風を失ったことは、おそらく博文館における後ろ盾を失ったことも意味したのであろう。以後も千代子は『女学世界』への寄稿を続けているが、『女学世界』に掲載された数多くの作

品は本としてまとめられることはなく、また『女学世界』誌上で評判となった連載も単行本化される時は別な版元から出版されているのである。

図 6



『エンゲージ』以降の千代子の活動を見てみることにしよう。大正3年10月、牧民社より自伝『生ひ立ちの記』が出版される(図6は大正3年11月18日の『読売新聞』朝刊1面に掲載されている広告である)。『生ひ立ちの記』は『女学世界』誌上に連載された原稿に加え、後半は潮風ことK先生との恋の顛末が書き下ろされて出版されたものである。また同じく牧民社より、大正4年6月に『惜春譜』が出版される。

『惜春譜』は『生ひ立ちの記』の姉妹本とも呼べる存在で、潮風についてはもちろんのこと、潮風以後の恋についても記されてある。大正5年5月には如山堂より『生ひ立ちの記』『惜春譜』の合本『生ひ立ちの記』も出版された。以後の著作は『冷炎』(京橋堂、大正5年11月)、『春雨』(京橋堂、大正7年1月)、そして出版された最後の作品は『毒蛇』(三徳社、大正8年10月)である。

図 7



『毒蛇』は『女学世界』第15巻第8号(大正4年8月号)から第17巻第6号(大正6年6月号)まで断続的に掲載された、千代子初の長編小説である(図7は大正9年5月12日の『読売新聞』朝刊1面に掲載された広告である)。連載開始前には誌面に予告広告が載り、それに対して読者から大反響があるなど全盛期を過ぎていたとはいえやはり『女学世界』読者から熱烈的な支持を受けていることがここからもわかる。このように鳴りもの入りで連載が開始された「毒蛇」ではあるが、結果的に掲載が不定期となり、ついには誌上で完結することなく連載は中断したまま消え失せてしまうのである。

以後千代子の作品は『女学世界』に掲載されることはなく、連載中断から

およそ二年後に書き下ろしを加えて発行された『毒蛇』が作家としての千代子の最後の作品となった。

『女学世界』誌上から千代子が姿を消した後、千代子に関する投書が数通掲載されている。

「鵠沼才人とうたわれた千代子様近頃は一寸ともお書きになりませんのね、丁度去年の今頃お家の前を通りましたら、赤いてがらのお髪かたむけてお庭の草花をちつと見て被居いました、亡くなつた赤ちやんの事思ひ出して被居るのではないかとたまらなくお気の毒になりました。深川波留」

「内藤千代子様は其後如何御暮し遊ばして被在るでせう。浮世を外に想を練り筆を磨いて在るのでせうか。あの方の御作は矢張御懐しいわ。深い執着がございます。愛媛、なでし子」

いずれも第19巻第10号（大正8年10月号）の『女学世界』読者欄に掲載された投書である。大正8年10月に出版された『毒蛇』を最後に、作家としての内藤千代子の足取りは完全に途絶えてしまう。一体なぜ、千代子は作家活動をやめてしまったのか。そしてなぜ、その名は忘れ去られてしまったのか。いまだ解明できていない、しかし千代子を巡る最も大きな謎なのである。

大正14年3月23日、千代子は大正12年に生まれた照子・光子の双子の姉妹を遺し、結核のため31歳で亡くなった。戒名は「秀文院釋妙頭大姉」であり、鵠沼の万福寺にある内藤家の墓に葬られている。その死は『女学世界』廃刊に先立つこと三ヶ月。千代子の死後まもなく、彼女が多数の作品を発表し、活躍の舞台となっていた『女学世界』は長い歴史に幕を閉じたのであった。

千代子作品に描かれた鵠沼

鵠沼で育ち鵠沼に暮らした千代子は、作品の素材として自らの身近を用いることが多く、作品には鵠沼がよく登場している。「田舎住居の處女日記」で一躍その名を『女学世界』読者に知らしめた千代子は、以後も「霜月日記」「お正月日記」など毎月のように誌上に登場し、読者の熱狂的な支持を受けた。千代子の日常生活を描いた日記にも当然鵠沼は登場しこれも興味深いものではあるが、ここでは千代子の初期小説であり、また読者間でも評判となった作品「まつかぜ」を紹介することにしよう。

「まつかぜ」の初出は『女学世界』第9巻第10号（明治42年8月号）で、同題で『スキートホーム』にも収録されている（目次では「松風」と記されている

が、本稿では「まつかぜ」で統一する)。鵠沼対江館を舞台に、篠原直男・千賀子兄妹、廣岡正・妙子兄妹、世間に名高い女流作家松岡蘭香という正体を隠している松岡春美子、そしてその松岡に恋をする高等師範の真面目な学生高村敏郎などが登場する。幼なじみで許嫁同士の千賀子と正、松岡春美子の直男への秘められた恋など、鵠沼を舞台に若い青年男女の恋物語が繰り広げられるのである。こうした瑞々しい恋や人間模様ばかりではなく、作品の舞台となっている鵠沼という土地もまた、この作品の重要な要素である。タイトルの「まつかぜ」も、松林が続く鵠沼の情景を喚起させる情緒溢れる題である。

「まつかぜ」の中に描かれた鵠沼の風景を、いくつか紹介しよう。

「花曇りの空のうつとりと海も霞ていつもは手に取るばかりの伊豆が薄墨のやう。只江ノ島の岸を洗ふ白波のみは永遠に変わらない。磯慣の枝ぶりひねた青松白砂はかなたに見ゆる富士までもとつゞき、左は小松まぢりの砂原を遠く隔て銀のリボン引のべた片瀬川、裾模様のやうな対岸の松林の間を走る電車。みなこれ一個の大なる箱庭、目を伏せればもう四月も十五日、盛り過ぎてあせた八重桃や牡丹櫻がホラリホラリとしつきりなしに時ならぬ雪を、昨日よりは五分通りのびたらしい広い芝生に散らす。³⁾

「あ、西行てばねエ兄様、大磯に鳴立つ庵と云ふのが御座いますわねけれどほとんどの鳴立つ澤は、この鵠沼のあたりだつたんですつて、岐度あの片瀬川の辺でもあつたのよ。昔はこゝらは大きな沼でね、その時分鵠の鳥つて鶴に似た大きな鳥が澤山おりてね、それで鵠沼といふんですとさ、現に池袋⁴⁾なんてとこがありますと。あら、松岡さんに聞いたのよ、事実さう言はれると大磯よりか此方の方が本場らしいわ。こんなに茫々した一ねエ何百年か以前はきつとそんな沼だつたんでせうね。心なき身にもあはれは知られけり、鳴立つ澤の秋の夕暮。⁵⁾

小説の幕切れの唐突さといい、構成にはまだ未熟さが見られるものの、読み終えると鵠沼の風景が目の前に浮かび上がってくるような、なんともいえぬ余韻をたたえた作品である。鵠沼が通低音として鳴り響いている『スキートホーム』の中でも、この「まつかぜ」は最も鵠沼というロケーションの印象が濃い作品と言えるであろう。

読者の中でも千代子の名前と鵠沼は深く結びついていた。『女学世界』の読者欄

³⁾ 内藤千代子『スキートホーム』、博文館、1912、186頁

⁴⁾ 原文では「池袋」となっているが、これは「川袋」の間違いであろう。

⁵⁾ 内藤千代子、前掲書、187頁

「誌友倶楽部」においても千代子と鶴沼に対する憧れを綴った投書が数多く見られるのである。

「内藤千代子様失礼ながら誌上にて申し上げます、私の様な奥州の田舎娘からこんな事を申上げてさぞお驚きなさるでせう、誌上にて床しき君がみ筆のあとを拝し、なんとなく御なつかしく御目にかゝりたい様な気がしてなりません、私貴女の日記文なにより好き、幾度もくりかえして見ますの、オ、貴女にも御両親は揃ふて入らつしやらないのですつてネ、あゝ千代子の君よ、私にも父はないのです、だから尚更自分の身に引きくらべて御いたはしう思て居るのです、ああ翼あらば鶴沼に飛んで行つて御会ひ申したいのです、御なつかしき千代子様よ、願はくは誌上にて御交際のほどを、宮城大和田花子」(第9巻第15号、明治42年11月号)

「本誌愛読の皆様方、いつもいつも才筆お振ひ遊ばす内藤千代子様を思はれぬ方がゐませうか、心の日記に心の秘密、扱ては驚く手紙に小説の松風に、逝く春など、近くは嫁がぬ人、もうもう其他一ツとして千代子様がお筆の示される限り私は読む度毎に体がこうしびれた様に感じ魂はみんなお作の中へ飛んで仕舞つて何とも彼とも丁度お酒にようた人はみなこんなだらうと思ひ升わ、ホ、ホ、ホ、ほんとうにお上手ですね、願はくば記者様よ、一度此の方のお写真掲げて頂戴な、諸嬢方も必ず御同意でせうと思ひ升、ア、私鶴沼の近くだつたら毎日腰^{こし}べん^{べん}當でさがし歩きますのにね、ホ、ホ、ホ、あのそれから、今後お作どしどし御掲載下さいな、ますます歓迎愛読しませうね。(後略) 女学世界最愛読女、大阪府下愛読者」(第10巻第1号、明治43年1月号)

「内藤さん＝大阪府下愛読者様の仰せの通り私は一昨年の秋以来片時も内藤千代子様の事を思はない日とてはありません、ほんとに何うしてあんなにお上手なのでせうならば花の主なる君居ます鶴沼のほとりへ飛んで行き原稿でも書いて居らつしやる所をそつとのぞいて見度い事いくらお慕ひしても御目にかゝる事はかなはないでせうから、せめて御うつしゑでも掲げて下すつたらどんなに嬉しいでせう、記者様どうぞどうぞ一生のお願いですから萩香様の美しい御佛を拝させて下さいな。宮城の多福子」(第10巻第2号、明治43年2月号)

「沼津に七日の避暑を終へて、後ち鶴沼に一泊する事となりましたから、千代子さんの事を宿の女中に聞いてみました、女中は片斷愛らしふ「ハー、なんですか、よく尋ねる方が有りますので、宅でも近頃評判になつてゐます…」と語った要領で、別に言ふ程でもありませんが、…御宅は母様と妹様の三人暮らしで、学校はお作に書いてゐる通り、只今はお宅でしてらつしたるさうです、年は十九で、

お美しいとの事、スツキリ背が高く、束髪でお召し物など随分ハイカラで、中々すましてゐらつしやるさうです。右近」(第10巻第13号、明治43年10月号)

長くなったが、これは当時の投書のごく一部である。もちろんすべての投書が千代子を賞賛しているわけではなく、「作品が甘くて浅い」というような批判的なものの中にも見受けられる。しかしそうはいっても千代子の人気は絶大であり、『女学世界』の読者欄に掲載された投書は、今では忘れられた千代子を巡る読者の熱狂を今日の我々に伝えてくれる貴重な史料なのである。

上に紹介した投書からも伺えるように、千代子は『女学世界』のスター的存在であり、読者の千代子本人に対する関心も非常に高かった。千代子の写真を見たいという読者のリクエストに応じてであろう、千代子の写真が『女学世界』に何度か掲載されている。

図8

図9



図8は第12巻第9号(明治45年6月号)に掲載された千代子の写真である。左上の枠の中に囲まれているのが千代子であり、また椅子に腰掛けて写っている

のは千代子と同時代に『女学世界』誌上で活躍した投書家花散里（本名上原綾子）である。千代子が『女学世界』誌上で振るっていた時代は『女学世界』の投書家時代とも呼べる時期で、千代子をはじめ花散里、さらには児童文学作家として著名な北川千代も松平鏡子のペンネームで多数作品を掲載していたのである。『女子文壇』などの投書雑誌を意識し懸賞文の募集を盛んに行った雑誌の編集方針と、文学熱に燃える女性たちの投書熱が見事に合致した、『女学世界』の投書全盛期時代であった。東京の裕福な家に生まれ何不自由なく育った令嬢である上原綾子は、境遇の違いを越えて千代子の親しい友人となり、両者の交流は『女学世界』誌上の作品を通じても披露されている。上原綾子が花散里の名前で「鵠沼海岸半日の清遊」と千代子の家を訪ねた日の記録を誌上に載せたかと思えば、千代子の方は松楨晴子の名で「東京印象記」を執筆し、上原家訪問記を記す。上原綾子は結婚のため『女学世界』誌上から去ったが、大正2年に病気のため夭折した。花散里もしくは上原綾子名義で『女学世界』誌上に発表された作品をまとめた遺稿集が大正3年7月に文陣閣出版部より『ひなげしの花』として出版されたが、千代子は序文を寄せて友人の死を悼んでいる。

また図9は第15巻第8号（大正4年8月号）に掲載された千代子の写真である。

「砂山の蔭」とタイトルがついているが、撮影場所はおそらく鵠沼のどこかの海岸であろう。

「皆様御存知で入しやいますか、千代様のお写真が掲げられましたのを？私は思はず歓呼を上げ小躍りしちやたの、あすこ鵠沼なんでしやうかあんな所へ行つて見たいわ、行つてみたいわ鵠沼へ。京都優梨香」（15巻第9号、大正4年9月号）

この写真が掲載された翌号、さっそくこんな投書が読者欄に掲載されている。ここにおいても、読者の中で千代子と鵠沼の名が結びついていることが示されているであろう。

森銑三と内藤千代子

ここまでは内藤千代子の生涯の概略、さらには千代子作品と鵠沼の関わりを紹介してきた。以後は少し視点を変え、鵠沼にゆかりのあることで知られている文人に焦点を当て、さらにその人たちと千代子の繋がりを紹介することにより、今まであまり知られていない千代子のエピソードを披露することにしよう。まずは、森銑三と千代子についてである。

内藤千代子について調べ始めて、最初にぶつかった問題は資料の少なさである。近代文学関係の研究書を開いてみても、内藤千代子の名前は見当たらない。千代子本人の著作もほとんど残っておらず、作品を読むことすら容易ではない。途方に暮れつつも膨大な量の『女学世界』をつぶさに調査することから私の研究は始まった。『女学世界』に掲載されている作品を一つ一つ複写して読み、また読者欄に掲載されている投書を手がかりに千代子に関する記事を集めていった。やがて調査の範囲を広げ、他の雑誌や新聞、さらには作家の日記や回想の中から千代子に関する記述を拾い出すことも始めている。膨大な史料の中から千代子の名前を探し出すのは、ある意味砂金探しに似ているとたまに思われる。空振りも多く労力を消耗する作業ではあるが、実はこうした探索が楽しくて、思いがけぬ記述に行き当たるとそれこそ金を見つけたようなうれしい気分になる。まさに資料調査の醍醐味である。今となってはわかるのだが、千代子に関する資料や証言がないわけではない。ただそれらは先行研究という道標もほとんどないまま散らばったままであるので、そうした資料を一つ一つ丹念に探し出して集めていかなければいけないところに困難がつきまとう。まだまだ調査を始めたばかりであり、今後さまざまな発見があるであろう。

本稿でも何度か言及しているように、近代文学の領域において千代子に関する文献はごくわずかしかな存在していない。そんな数少ない言及者の一人として、森銑三（1895-1985）が挙げられる。森銑三は在野の歴史学者そして書誌学者として著名であり、膨大な研究を遺した人であるが、太平洋戦争で自宅を焼失後し、昭和22年より鶴沼に移り住んでいるように鶴沼とも縁が深い人である。森銑三は昭和26年に発表した「明治以降の女流作家とその作品」という論考の中で千代子への言及を行っているが、女性作家研究の系譜において千代子が言及されているのは非常に珍しく、注目に値する論考である。ここに引用するのは、「明治以降の女流作家とその作品」の中の千代子に関する記述である。

「明治の末から大正へかけての『女学世界』に才筆を振つて、それらを『スピートホーム』『ホネームーン』『エンゲージ』などといふ書名の本にした内藤千代子といふ、若い婦人のあつたことを一言して置いてもよいであらうか。それらの著書も今読んだら、甘いものといふを免れぬかも知れないが、その筆には才気が煥発してゐて、若い人達の心を捉へるものがあつた。千代子氏は若くして逝いた。その三部作ともいふべき右の三著も、近頃は一向に見かけないやうである。⁶」

⁶ 森銑三『森銑三著作集続編第六巻』、中央公論社、1993、222頁

内藤千代子と森銑三は現在、同じ鶴沼の万福寺、しかもそれほど遠からぬ場所に眠っている。森銑三の著作の中で千代子の名前を発見した時、驚きとともに初めて万福寺の千代子の墓を訪れた秋の日の情景が鮮やかに蘇ってきた。生前に接触はないが、千代子と森銑三は生まれが二年しか違わない、ほぼ同時代の人である。しかし千代子は夭折し、森銑三は89歳で亡くなるまで悠々と執筆活動を続けていた。そんな二人が現在同じ万福寺で眠っているのも、何やら不思議な縁ではなからうか。

武林無想庵と中平文子を結んだ内藤千代子

鶴沼と関わる文人と千代子のエピソードをもう一つ紹介することにしよう。東屋に逗留した作家の一人が武林無想庵（1880-1962）である。作家そして翻訳家として知られる無想庵は、二番目の妻であった中平文子（1888-1966）との破天荒な結婚生活でも有名である。中平文子はのちに貿易商宮田耕三と結婚をし、宮田文子の名前で小説や旅行記を発表するが、無想庵と出会った頃の文子は中央新聞の記者ながら身分を隠して吉原などに潜入して裏面を暴いた『婦人記者化け込みお目見得廻り』などで話題となり、世間を騒がせ「妖婦」とも称されていた。結婚した無想庵と文子はパリへと渡り、そこで娘イヴォンヌ（日本名は五百子）が生まれ、無想庵は寝取られ男である自らの境遇を描いた作品「[Cocu] のなげき」を発表し、大正15年には文子が愛人にピストルで射撃されるという事件が発生するなど、無想庵と文子はエピソードには枚挙に暇がない夫婦であった。

そんな二人の出会いの場が鶴沼の東屋であることはたびたび言及されているが、実はこの両者を引き合わせたのが内藤千代子であることはあまり知られていない。奔放な生涯を送った文子は晩年に自伝『わたしの白書』を出版しているが、その中で無想庵との出会いを描いており、そこには千代子も登場している。

「むかし鶴沼（藤沢市）に内藤千代子という女流作家が住んでいた。大正十年ごろのことだ。千代子さんは、少女小説では当時鳴らした作家だった。なんで私がこの内藤千代子さんを訪ねて行ったかはいま思い出せないが、私が五月のある日、内藤さんを鶴沼に訪ねて行って彼女の家で半日ほどいたときのことである。千代子さんは色の浅黒い、眼鼻だちもパツとしない、あまり美しい人ではなかったように覚えているが、賢くて話の面白い才女だった。「ねえ文子さん、今、鶴沼の東家にかわった文士が来ているわ。あなた知っていらっしゃるでしょう、フランス文学で有名な武林無想庵。私ちよくちよく訪ねて行くの、ふだんはむつつり

して、原稿用紙と睨めっこばかりしているらしいけど、お酒が入ると俄然おしゃべりになって話が面白いの。博学でフランス文学の話になると、内容の豊富な文学聞いているみたい。チョイとした勉強になるわ。これから二人で行ってみませんか？北海道の土地が売れたんで、近く洋行するんですって。⁷⁾

このようにして文子は千代子に伴われて、東屋へと出かけ無想庵と初めて対面したのであった。無想庵との出会いのエピソードに千代子の存在は欠かせないらしく、文子が73歳にしてヒマラヤの秘境フンザ王国に出かける旅行記『七十三歳の青春』の冒頭に記された自己紹介においても、千代子に無想庵を紹介されたと名前が出てくるのである。

無想庵の方も文子との最初の出会いを自伝的小説「性欲の触手」の中で描いている。作品の中で文子は山際道子、千代子は齋藤美代子という名で登場している。千代子に対する無想庵の描写を見てみることにしよう。

「但し、齋藤美代子さんだけは、その中の一人としては、まだよつぽどデカダン程度の微弱な方で、睫毛の濃い、伏目勝のその大きい眼や、赤味を帯びた豊頬、盛上った肩の肉の締り加減、それから力強い腰の辺の太い線などが、正に発達の絶頂に立つ年増女の健康を思はせた。さうして美代子さんの唇は、その厚く重苦しい唇は、凝結した血のやうな色をして、堅く結ばれたまゝ、非常に堅く結ばれたまゝ、滅多には開きさうに見えなかつた。⁸⁾

千代子の生涯でも紹介したように、千代子の作家としての最後の作品は大正8年10月に出版された『毒蛇』である。この「毒蛇」は未完のまま連載を中断したといういわくつきの作品であり、中断の原因として千代子の健康問題も理由の一つとして推測されている⁹⁾。千代子は結核で亡くなっており、「毒蛇」連載の頃から健康を損なっていたのかと私も考えていた。「毒蛇」のヒロインは小林幸世という女流作家で、幸世の人物造形は千代子自身に極めて近い。そして小説の中で幸世は結核を患っている設定になっているのである。しかし無想庵そして文子の記述を読む限り、この時期の千代子が結核だったのか疑問を感じるようになった。千代子の晩年については今後の調査の課題であるが、作家としての活動がなくなり表舞台から消え去った後の千代子の姿を、無想庵そして文子の記述が思いがけず伝えてくれるのである。

⁷⁾ 宮田文子『わたしの白書』、1966、新潮社、25-26頁

⁸⁾ 武林無想庵『現代日本文学全集70』、筑摩書房、1957、128頁

⁹⁾ 森山敬子『「女学世界」に咲いた花』『史の会研究誌』、1993、123頁

東屋に滞在当時の無想庵は、不動産を売り大金を得てパリへ行くことを計画中だった。当初は友人の辻潤を連れていくはずだったが、文子は千代子にけしかけられ、結果的に文子が旅の道連れになったのである。

「でもねーなんていわないで、文子さん。無想庵をこの際つかまえなさいよ。さっきのアレ、まんざらデタラメではないらしいわ、無想庵のああいったときの眼つきで、私にはわかる。あなたにはいいチャンスよ。それに私が無想庵でも洋行費を払って道づれにつれてゆくんなら、あんなグウタラベエの辻潤よりもあなたにするわ。あなたが行きたいというんだったらーねえ文子さん、無想庵つかまえなさいよ。彼の気が変わらないうちに、早く約束させるのよ。このプランきつと実現するわよ。(中略) 明日もう一度東家へ行って無想庵にお逢いなさい。今さんにすすめられたあなたのヨーロッパ行き、案外早く実現するかもしれないー」才女の内藤千代子女史は、東家からの帰り道で、ケシかけるように、私にしきりにこうすすめた。¹⁰

なおここで少し事実検証をしておけば、無想庵と文子が初めて会ったのは大正9年2月か3月頃のことだと思われる。よって、文子の『わたしの白書』の5月というのはおそらく記憶違いであろう。文子と無想庵が田山花袋の媒酌のもと帝国ホテルで挙式をしたのが大正9年の4月である¹¹。また無想庵の「性欲の触手」の中では、三田の学生が文子と無想庵を引き合わせ、さらにその文子が無想庵に千代子を紹介したということになっている。しかし文子の自伝によると千代子と無想庵は以前から面識があったようで、この部分はフィクションが入っているのかもしれない。全44冊に渡る膨大な自叙伝『むさうあん物語』を調べてみても、残念ながら文子との出会いの場面は記されていない。よって両者が本当のところどのような経緯で知り合ったのかはまだ確定はできないが、しかしいずれにせよ千代子が文子と無想庵という世間を騒がせたカップルの成立の場に居合わせたことは間違いないのである。もし千代子が両者を引き合わせなければ、「「Cocu」のなげき」が生まれることはなかったかもしれない。そんなことを想像しながら作品を読むのも、また楽しい。

結びにかえて

鴿沼に暮らしていた作家、内藤千代子。千代子の作品は鴿沼と深く結びつき、また作品からは千代子の生き様が浮かび上がってくるのである。明治から大正に

¹⁰ 宮田文子、前掲書、29頁

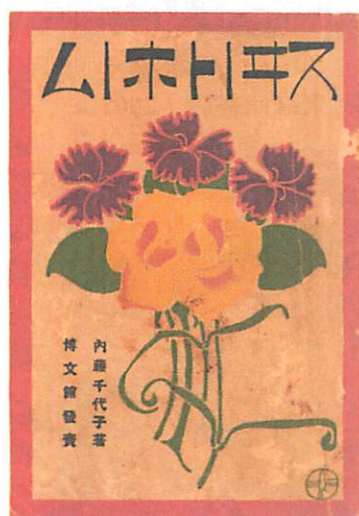
¹¹ 武林無想庵『武林無想庵盲目日記』、記録文化社、1972、476-477頁

かけて才気と文才でその名を世に轟かせたこの女性作家の再評価は、今こそなされるべきであろう。

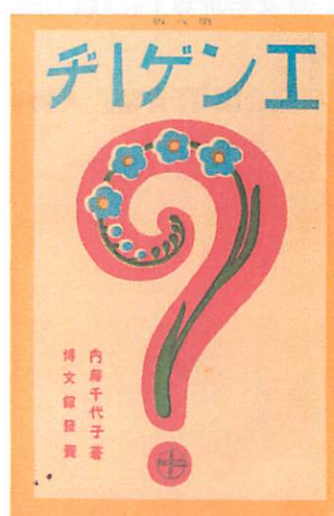
私は現在内藤千代子に関する調査を進めているが、まだわからないことも多く、特に千代子の晩年に関しては不明な部分がたくさん残っている。時は過ぎ、今となっては千代子を覚えている人もごくわずかとなっているであろう。しかしそんな状況であるからこそ、私は千代子に関する証言を集めたいと思っているのである。地元の方々と協力して千代子を巡る記憶を掘り起こしていくことも、研究における重要な目標の一つである。なお筆者はホームページを開設し、ネットを通じて内藤千代子に関する情報発信を行っている

(<http://sagakeiko.net/naitochiyoko/>)。今ではほとんど残っていないであろう『スウィートホーム』の初版本をはじめ、千代子の著作や作品リストを紹介しているので、本稿をきっかけとして千代子に関心を持たれた方にアクセスしていただけたら幸いである。今後千代子作品の復刻が進むとともに、地元鵜沼において鵜沼文人の先駆けである内藤千代子についての関心が高まることを願いつつ、筆を置くことにする。

(さが けいこ)



明治44年9月博文館発行
装幀：杉浦非水 装画：竹久夢二



大正元年12月博文館発行
装幀：杉浦非水

参考文献

- 上原綾子『ひなげしの花』、文陣閣出版部、1914
岡田八千代編『閨秀小説十二篇』、博文館、1912
河岡潮風『五五の春』、博文館、1912
川端康成記念会編『川端康成全集補巻一』、新潮社、1984
高三啓輔『鵠沼・東屋旅館物語』、博文館新社、1997
武林無想庵「性欲の触手」『現代日本文学全集 70』、筑摩書房、1957
武林無想庵『むさうあん物語』、無想庵の会、1963-1965
武林無想庵『武林無想庵盲目日記』、記録文化社、1972
内藤千代子『スキートホーム』、博文館、1911
内藤千代子『生ひ立ちの記』、牧民社、1914
内藤千代子『毒蛇』、三徳社、1919
宮田文子『わたしの白書 幸福な妖婦の告白』、講談社、1966
宮田文子『七十三歳の青春』、朝日新聞社、1962
森銑三『森銑三著作集続編第六巻』中央公論社、1993
森山敬子『『女学世界』に咲いた花 -内藤千代子について-』『史の会研究誌 第2号』、1993
らいてう研究会編『『青鞥』人物事典 110 人の群像』、大修館書店、2001

鹿地事件とは何か？ ～白公館の闇～

(鶴沼松が岡在住)猪俣良樹

鹿地事件の最大の特徴は、アメリカ対日占領期(1945～1952)に頻発した一連の怪事件(帝銀事件、下山事件、松川事件etc.)が全て迷宮入りに終わってしまった中で、唯一真犯人が特定されたケースだということに尽きる。

鶴沼で起きた拉致事件 1951(昭和26)年11月25日夕、縁あって後年私たちが永住することになった鶴沼の地で、22年後の金大中拉致事件と極めて類似点の多い奇怪な事件が起きた。鶴沼で結核療養中の作家鹿地亘が夕食後、恒例の散歩に出かけたまま突然行方不明になったのだ。病院から派遣されていた看護婦は、夜更けになっても鹿地が戻らないため、東京の自宅に居た夫人に急報。夫人は、夫が予めから公安当局に目を付けられていたことから、彼が何らかの事件に巻き込まれた可能性を直感、あえて警察へは正式の捜索願を出さず、知人の手助けのもと、密かに八方手を尽くして夫の行方を捜したが、手がかりは一切得られなかった。

不安と焦燥のうちに迎えた12月、突然鹿地から夫人宛に葉書が届いた。紛れもなく夫の筆跡で書かれていた文面は、「散歩中、外国人の車にはねられ、怪我をしたが、相手の家で親切に手当てを受けているから、安心してほしい」との内容だった。おかしい？ 葉書を読み進めながら、夫人がそう感じたのも当然のこと。とりわけ夫の文面の最後の一行を目にしたとき、夫人の疑いは深刻さを増した。そこには、あるべき連絡先がなく、代わりにただ「白公館にて」とだけ記されていたからだ。「葉書は誰かに検閲されている。だから夫は、私にしか判らない白公館という符牒を使って、自分が何者かに拉致監禁されていることを伝えたのだ。」

鹿地夫人が葉書の文面から何故そう疑ったかを知るためには、そもそも白公館とは何であり、その言葉が何故夫妻にしか判らない符牒なのかを明らかにしなければならない。

白公館とは？ 話は両大戦間期の中国へと跳ぶ。1921(大正10)年、上海に中国共産党が設立されて以来、中国は国民政府、軍閥、共産党による三つ巴の内戦

が続いていた。中国支配を目論む日本は、共産軍の抵抗に手を焼く国民政府首席蒋介石との取引を狙ったが、一方ソ連は日本軍の排除と共産軍支援のため、国共合作を強力に働きかけた。蒋介石は目の敵である共産軍との共闘を渋っていたが、1932(昭和7)年の満州国建国、さらに盧溝橋事件、上海事変と日本軍の露骨な攻勢が強まるに及んで、遂に(第二次)国共合作へと踏み切った。しかし共闘は表面だけのこと。蔭では相変わらず国府軍と共産軍の暗闘が繰り広げられていた。

中国内外における緊張関係が最高潮に達する直前の1936(昭和11)年1月、鹿地亘は保釈中の東京を逃れ、上海へ亡命した。既に左翼の闘士として、日本警察の厳しい監視下にある身だった。

鹿地は1903年(明治36年)5月1日、父祖代々裕福な地主の長男として、九州大分に生まれている。東大文学部二年を終えた春休み、帰省中の車中でレーニンの『国家と革命』を原文で読み、その理想の高さと情熱の激しさに衝撃を受ける。以来、久板栄二郎、中野重治などの左翼文芸仲間たちと、農民闘争やストライキ支援などに飛び回る傍ら、プロレタリア作家として、共産党機関紙「無産者新聞」やナップ(全日本無産者芸術聯盟)の機関紙「戦旗」に『兵士』などの作品を次々に発表、編集にも携わった。1933年拷問で殺された小林多喜二(『蟹工船』)と親しく交わったのもその頃である。東大卒業後も運動を続け、1931~34年の間に治安維持法違反で18回も投獄されている。1935(昭和10)年、2年間の獄中生活の後、執行猶予付きで保釈され、日本での運動に見切りをつけた彼は、当時パスポートもヴィザも要らなかった上海行きを画策。36年1月、外国巡業へ出かける直前のチャンバラ劇団に裏方として入り込み、船で上海へ渡った。チャンバラ芝居の公演先は虹口の日本人街にあった「上海歌舞伎座」。ここで彼は裏方仕事もそこそこに、近くの内山書店へ駆けつけ、店主内山完造に面会した。

1917(大正6)年に開業した内山書店は日中文化人の架け橋的文化サロンとして日本でも有名であり、谷崎潤一郎、金子光晴、横光利一、林芙美子ら上海を訪れた殆どの作家が書店に内山完造を訪ねているが、その多くは、内山の無二の親友である魯迅に紹介してほしいというのが、本音だったようだ。鹿地もまた例外ではなく、一面識もない内山に会うやいなや、魯迅への紹介を頼み込んでいる。その甲斐あって、魯迅の信頼を得た鹿地は、仲間の小説の日本語訳を彼から頼まれるまでになり、1936(昭和11)年10月に魯迅が没したときは、棺の担ぎ役も仰せつかっている。また1936年から刊行が始まった改造社版「大魯迅全集」の中心訳者でもある。

鹿地は結婚後、魯迅作品の翻訳上のアドバイスをを得るため、魯迅未亡人宅に近いフランス租界に住んでいたが、1937(昭和12)年8月の第二次上海事変勃発以来、日本官憲の監視が強まったため、自宅を出て、魯迅未亡人宅など隠れ家を行き交し、11月の日本軍上海完全制圧を機に、脱出を決意。外国人に見せかけるため、髪を茶色に染め、香港、広東、更に日本軍から彼の首に5万円の懸賞金がかかる中を重慶まで落ち延びた。南京大虐殺の原因を作った同年12月の日本軍南京占領時には、鹿地は既に重慶で、戦争終結時まで続く反戦闘争を開始していた。

ここで漸く白公館の出番になる。白公館とは重慶の郊外にあった政治犯収容所の名称で、主に共産党系のスパイやテロリストと看做された人物が収容されていた。厳しい尋問や拷問で恐怖の名を轟かせていた白公館は、CIAの前身OSS(戦略業務局)が深く関与した中米合作の秘密基地であり、中国版グアンタナモ収容所の趣がある。ここには、後に中日友好協会会長になる廖承志のような大物政治家も一時監禁され、解放前には周恩来の娘も幽閉されていた。1949(昭和24)年11月、解放軍の攻勢を前に、国府軍は白公館に火を放って退却したが、焼け跡から2千を超す死体が掘り出されたという。

鹿地自身は共産党の大物郭沫若に身分を保護されていたが、同志が国府側に捕まり白公館にぶち込まれたことを密かに連絡するときには、「自動車事故に遭った」という言い方で知らせ合っていたという。この事実は当然鹿地夫人も熟知していた。

「信念の人」登場　ここで舞台は、1951(昭和26)年、アメリカ軍占領下の日本に戻る。鶴沼を散歩中、行方不明になった鹿地から漸く留守宅に届いた葉書の「自動車事故に遭って白公館に居る」という文面は、直ちに日中戦争中の悪夢を夫人に蘇らせた。夫は何らかの組織に拉致監禁されているに違いない！　しかしその組織がまさか米中央情報局(CIA：Central Intelligence Agency)の直属組織であろうとは、さすがの夫人も気付かなかった。白公館がCIAの前身と関係が深いことは、夫人も知っていたが、日本にCIAの所属機関が存在していることは、それまで全く知られていなかったからだ。

戦後、一旦重慶から上海へ戻った鹿地夫妻は、中国に骨を埋める覚悟の内山夫妻と別れ、1946(昭和21)年、帰国したが、翌年の終わり、内山完造もまた、国府側から敵性人物というレッテルを貼られて、帰国を余儀なくさせられている。帰国後鹿地は『中国の十年』『魯迅評伝』など幾つかの作品を発表したが、48(昭和

23)年重い結核を発病、1950(昭和25)年国立清瀬病院で大手術を受けた。その年の12月、院長の勧めで東京の自宅を離れ、鶴沼で療養に専念することになったが、それが大事件に巻き込まれるきっかけになろうとは、神のみぞ知ることだった。

拉致の1951年が明け、翌52(昭和27)年になっても、鹿地は行方不明のまま。関係者の懸命な搜索も功を奏さなかった。空しく正月が過ぎ2月中旬の日曜日、神田神保町の内山書店に、一人の青年が完造を訪ねてきた。山田と名乗る青年は不在の内山に代わって面会した弟に、鹿地から託されたという妻宛のメモを差し出した。鹿地の家族は万が一の危険を恐れて引っ越していたため、直接渡せなかったので、代わりに書店を訪ねたと言う。妻宛のメモには「自分は売られた。忘れてくれ。子供たちをよろしく頼む」と書かれていた。

山田が鹿地のメモを持って内山書店を訪れて間もない1952年4月28日、講和条約が発効、日本は独立したが、鹿地の消息は依然不明。その後も山田は新たな鹿地のメモを持って、何回か内山書店を訪れたが、内山は会わなかった。山田善二郎と名乗るこの青年が信用し切れなかったからだ。メモの筆跡は鹿地のものに間違いなかったが、青年は彼が監禁されている米軍施設のコックをしているというだけで、肝心の施設の場所を絶対に明かそうとしなかったことも不信の一因だった。内山が創設し理事長の職にある日中友好協会(鹿地は理事)は、中国共産党の出先機関ではないかとのデマが絶えず流されている状況の中で、これには何か陰に深い陰謀が仕組まれているのではないかと、うっかり動くと、相手の罠に嵌る恐れがありそうだ。こう内山が疑うのも無理はなかった。

1952年9月初め、鹿地が米軍機関に誘拐されたとの英文怪文書が出回った。山田の話を裏付けるような内容だった。もしこれが事実なら、このまま放っておくと鹿地の命があぶない。内山の命を受けた知人が山田の出身地に赴き彼の身元調査をした結果、本人の出身や家族についての話が全て裏付けられた。信用できそうだ。そう判断した内山は訪れた山田に初めて面会、鹿地の現状を詳しく問い質した。既に9月も中旬に入っていたが、このとき山田青年が打ち明けたのは占領下の驚くべき事実だった。

キャノン機関の魑魅魍魎 1951年11月29日深夜、山田がコックとして働く川崎の「TCハウス」(CIAキャノン機関の川崎支部：米軍に接收された元東京銀行の社員用施設)に、頭からすっぽりオーヴァーを被せられた一人の「お客さん」が連れ込まれた。結核の重症患者ということで、山田は事前に薬品や白衣などを揃え

るよう指示されていた。明らかに特別扱いされており、彼が近付くことの許されなかった「客人」と図らずも接触することになったのは、男が連れ込まれて四日目の早朝のこと。血相を変えた日系二世の米軍人に叩き起こされ、白衣を渡された。「客人」の部屋へ至急行けと言う。その男は部屋の手洗いで倒れていた。クレゾールを飲んで自殺を図ったと見え、そばに空瓶が転がっている。吐き出した汚物でぐっしょり濡れた体をベッドに運び込んだ山田に、係の米人が「これを読んでくれ」と男の書き残したメモを渡した。

「内山様、私は信念を守って死にます。鹿地」

「客人」が鹿地という名前であることを山田は初めて知った。そして「信念」という言葉に強く打たれた。山田の最も好きな言葉だったからだ。

「信念の人」山田善二郎は海軍航空隊員として特攻機に乗り込む寸前に敗戦を迎えた。まだ十七歳だった。戦後の混乱期に家族を養うため、1948(昭和23)年、かつての敵だったアメリカ軍の将校、横浜のジャック・キャノン邸でコックとして働き始めた。キャノンがCIA直属機関のヘッドであることを知ったのはずっと後のこと。ただしょっちゅうパーティーが催され、日本の政財界の大物や国警長官、警視総監などもよく姿を見せていたから、相当の権力者だろうと見当はついた。李香蘭こと山口淑子がアトラクションに呼ばれ、「支那の夜」を唄ったこともあると言う。

キャノン邸を辞めた後、今度は、後に鹿地が連れ込まれることになる川崎の「TCハウス」で働き始めた。その間、従業員が「お客さん」と密かに呼ぶ男たちが次々に連行されては、幾つかの部屋に監禁されていることを知ったが、山田は一切詮索せず、ただ黙々と料理を作っていた。そんなある日、「お客さん」の一人である鹿地との運命的な出会いが起きたのである。自殺事件以後、山田は鹿地の係を命ぜられ、毎日身近に接するようになった。「信念の人」として鹿地を尊敬する山田に対し、鹿地もすっかり気を許し、遂には家族宛のメモを託すまでになった。

山田が引き受けた秘密の連絡は、実行すれば、冥暗の闇に覆われたアメリカの国家機密を暴露するという大変な行為である。万が一バレれば、彼自身がすぐ消される運命にあることは本人も充分承知していた。それでも敢行したのは、類稀な彼の正義感と廉直な使命感に基づいていることは間違いない。ただ実行には細心の注意を払った。必ず日曜。さらに尾行を恐れて変装をしたり、電車を何回も乗り換えたり、ドアが閉まる寸前に電車を飛び降りたりというスパイ映画まがい

の神保町行きを重ねた。

ところが、内山側関係者の手違いで、山田の名前が朝日の記者に漏れ、週刊朝日の1952・11・30号「姿を消した鹿地亘氏～失踪事件を推理する」という特発記事の中で、実名が紹介されてしまった。それを知った瞬間、体中の震えが何時まで経っても止まらなくなった、と後年山田は述懐している。ここに居たら殺される！山田は直ちに下宿を飛び出し、内山の知り合いを頼って、住居を転々とした。急遽、内山完造を中心に関係者が対策を協議した結果、全てを公にするしかないとの結論になった。としても、こんな危険な作業を引き受けてくれる人物がいるだろうか？その時、全員の一致した人物は、社会党の衆議院議員で弁護士でもある猪俣浩三だった。

舞台は国会へ 父猪俣は幸か不幸か、人に頼まれると厭とは言えない性分だった。戦前から、誰もが怖気を振るう公安関係の弁護を多く引き受けている。戦前なら例えば人民戦線事件がある。南京陥落の報に日本中が沸き立っていた1937（昭和12）年12月及び翌2月に、荒畑寒村、向坂逸郎、大内兵衛、美濃部亮吉ら左翼と目された人物500人近くが根こそぎ検挙されたという事件。あるいは大物スパイ事件として有名な1942（昭和17）年のゾルゲ事件。こうした事件の被告たちを次々に弁護している。戦後なら例えば帝銀事件の死刑囚平沢忠道ら多くの被告の弁護に立ち、政界引退後も、アムネスティ・インターナショナル日本支部理事長として人権擁護に執念を燃やした。私の大好きな「高貴なる野蛮人」の一人である。

1952（昭和27）年11月20日、内山完造ら関係者が議員会館に猪俣浩三を訪ね、鹿地の救出を相談した。初め猪俣は眉唾な話だと疑ったが、2回目の訪問での山田の詳細な報告及びその後の裏付け調査から真実と判断。直ちに斉藤国警長官（パソコンで打つと、初め滑稽長官と出てくる、この妙）に救出を依頼したが、長官からは、たとえ事実だとしても救出などとても無理だという冷たい返事しか返ってこなかった。（後に斉藤とキャノンはツーカーの仲であることが判明。長官は初めから鹿地事件の全貌を把握していたのみならず、猪俣の依頼も直ちにキャノンに通報されたものと推測される。）警察頼みにならずと判断した猪俣は、キャノン側が隠蔽工作をする前に動こう、と12月6日、緊急の共同記者会見を開き、遂に日本中が騒然となる大事件に発展した。

12月7日、猪俣の要求に基づき、本件を翌日の衆院法務委員会で緊急質疑する

ことに決定。その夜8時、鹿地夫人から猪俣へ電話連絡があり、夫が突然新宿区上落合の自宅へ戻ってきたという。翌8日朝、国警長官から、鹿地が釈放されたとの電話があり、夕刊各紙が大々的に報道したが、鹿地自身は再び自宅から姿を消した。果たして当人から連絡が来るかどうか不明のまま、猪俣は法務委員会で爆弾質問。その日から猪俣の周りは大勢の報道陣が張り付くようになった。

12月9日夕、猪俣は司法関係の会合で外出。自宅前に張り付いていた報道陣が、すわこそと全員彼の車を追いかけ、玄関前が無人になったことを確かめ、鹿地が密かに来訪。猪俣は会合場所を裏口からこっそり抜け出して自宅へ戻り、翌日の証人喚問の綿密な打ち合わせを鹿地と済ませた後、何食わぬ顔で会合へ戻った。翌10日に鹿地の記者会見、さらに国会での証言が始まった。こうして明らかになった拉致事件の全貌はさらに驚くべき内容だった。

拉致と監禁の実態 1951年11月25日午後7時ごろ、恒例の散歩に出かけた鹿地は、江ノ電沿いを鵠沼駅から柳小路駅へ向って歩いているところを、擦れ違った車から降りた3人の大男に襲われ、殴られて車に連れ込まれたうえ、目隠しされ手錠を嵌められた。キャノンらしき男に名前を言えと怒鳴られ、拒否すると、ブラック・ジャックと呼ばれる拷問具で膝頭をしたたか殴られ、激痛が走った。かなり走ってから、後に本郷の岩崎邸と判明した広大な洋館に連れて行かれ、結核治療との交換条件で、中国やソ連に対する二重スパイの役割を強要された。時は正に米中ソを巻き込んだ朝鮮戦争の只中。どうやら中国での反戦活動時代に築いた彼の顔の広さが狙われた理由だと見当は付いたが、彼はきっぱりと拒否。抗議のハンストに手を焼いたのか、4、5日後、これも後に川崎のTCハウスと判明する別の建物に連行された。数日後、絶望のあまり、鹿地は自殺を図った。初めはベルトを輪にして天井のシャンデリアにぶら下がったが、シャンデリアのコードが切れて失敗。とっさに手洗いにあった洗浄用のクレゾール液を飲み干したのだ。企てが未遂に終わったことが、彼を救世主の山田に結び付ける結果になったのだから、運命とは不思議なものだ。

明けて2月、大勢の男たちが連れてこられた。朝鮮戦争の捕虜たちだった。ここで洗脳してから、スパイとして戦場へ送り返されるという。鹿地もまた同じ運命を強要された一人だったのだ。山田は鹿地にメモを無事内山に届けたと報告、鹿地の胸に釈放への希望が沸いたが、待っていたのは釈放ではなく、新たなCIA施設「茅ヶ崎C-31号館」への移送だった。その後、なんの進展もないため、彼

は死を覚悟、重慶生まれの長女暁子への遺書を山田に託した(この手紙は後に『娘への遺書』という本になり、中央公論社から発売)。そのうち山田が勤めを辞め、彼は又もや都心の施設へ移された。希望はどんどん遠のいてゆくように思えた。

拉致から満一年を過ぎた1952年11月29日、鹿地は国外への移送を告げられた。とうとう最後が来た。彼は覚悟を決めた。目隠しをされ、軍用機に乗せられ、着いた処は沖縄！ そこからジープで山奥の殺風景な建物へ。だれも近付けない秘密基地。何の情報もないまま、今日処刑されるかそれとも明日かという生殺しのような一週間が過ぎ、12月6日、突然再び東京へ戻ると言われた。同日猪俣が東京で開いた共同記者会見で、事態が急展開していることなど、勿論知る由もなかった。B29機に乗り早朝の沖縄を出発。7日午前6時、立川飛行場着。連行された事務所、釈放の条件として、二か条の誓約書にサインすることを強制された。

「一つ、私はソ連のスパイであったことを認めます。二つ、私は米国政府に賠償を要求いたしません。」余りにも理不尽な誓約書だったが、釈放されることが最優先だった。自らの体をナイフで傷つけるような痛みで、彼はサインを終えた。その後、渡された新聞に、マイクの放列を浴びている山田の大笑しの写真が載っているのを見て、鹿地は全てを了解した。山田がやってくれたのだ！ 再び目隠しで車に乗せられ、降ろされた処で目隠しを外された。眩しい目に神宮の絵画館が飛び込んだ。降りたら後ろを振り向いてはいけない、そう注意されたとおり、鹿地は真っ直ぐ前を見据え、一年振りの自由に未だ慣れない足で、黄金色に敷き詰められた銀杏の落葉を懸命に踏み締め歩いた。

あとは一気呵成。上落合の自宅で妻や二人の娘と奇蹟の再会。12月10日朝、報道陣でごった返す猪俣自宅での記者会見。その日の午後、衆議院法務委員会での証言。その夜から暫くの間、彼は猪俣の高輪の自宅に寝泊りすることになった。近隣の家は片端から報道陣の臨時下宿となり、自宅前は常に記者がうろうろしながら、人の出入りをチェックしていた。高校一年だった私も、学校の行き帰りに、よく彼らに捉まり、中の様子を聞かれたりした。父と鹿地はいつも奥の居間で何かひそひそ話し合っていた。そんなある日、お手伝いのけたたましい叫び声と共に、居間の縁の下から、蜘蛛の巣だらけの男がのそのそ這い出してきた。Y新聞の記者だった。父と鹿地の内緒話を縁の下で聴き取ろうとしていたらしい。

12月11日午前、アメリカ大使館から「カジを監禁した事実はない」との公式声明。「彼はスパイ容疑で短時間取調べて釈放。後は本人の希望により私人宅で保護された」とのこと。続けて沖縄基地司令官からも、「カジなる人物を拘束した事

実はない」という追い討ちの声明。

同日、衆院外務委員会で、外務省伊関欧米局長と斉藤国警長官が、「三橋という元スパイが自首し、鹿地が彼の同僚で某国のスパイであることが判明した」と発表。完璧な日米連携プレーだった。これがアメリカ側の起死回生の隠し玉だったのか！



(左から猪俣浩三、鹿地亘、内山完造、山田善二郎

鹿地は愕然とした。

:1952・12猪俣宅にて)

関係者が危惧したとおり、その瞬間からマスコミの興味は、不法監禁の有無ではなく、鹿地が果たしてスパイであったのかどうかという点に完全に摩り替わった。アメリカは日本のマスコミの付和雷同性、即ち興味がAからBへと一斉に移り変わる点を熟知していた。果たして新聞・ラジオ(TVの本放送は翌1953年から)は、鹿地と三橋某との国会での対決(「あなたとは一面識もありません」「鹿地さん、あなたは何故しらばくれるんですか? 今まで何度もルポの交換をしてきたじゃないですか」)などを興味本位で報道、肝心の拉致監禁問題は霞の彼方へ消え去ってしまった。あまつさえ鹿地は、スパイ罪で起訴できないため、電波法違反という奇妙な罪状で起訴されるに至った。拉致の被害者が逆に犯罪の被告にされてしまったのだ。それでも鹿地は病身をおして、拉致事件の真相を書き綴り(『暗い航跡』など)、不正を訴え続けたが、なぜか世間の反応は鈍かった。

1969(昭和44)年、彼の無罪が確定。既に拉致から18年が経過していた。判決は新聞の片隅に小さく報じられたが、高度成長に沸きかえる日本の中で、その判決の意味するところは、もう誰にも判らなかった。そして多分いまなお…。

(いのまた よしき ノンフィクション作家)

(なお「語る会」の冒頭でご紹介いただいた小著『黒いヴィーナス ジョセフィン・ベイカー〜狂瀾の1920年代、パリ』(青土社)の主人公と鶴沼との幽かな幽かな繋がりに興味をお持ちの方は、著者のホームページ

「<http://members2.jcom.home.ne.jp/creojbvn/>」をご参照ください。)

もう一人の「村娘」

岡田 哲明（会員）

はじめに

岸田劉生の描く村娘といえばモデルは「於松さん」こと川戸（旧姓 葉山）マツさんと誰しもが思うに違いない。しかし、劉生は彼女以外にも「村娘」と題して別人をモデルにした絵を創作しているのである。

次ページに掲載したのがその絵で、直近では北海道立函館美術館（2007. 6. 9～7.29）、釧路市立美術館（2007.8.4～9.9）、刈谷美術館（2007.9.15～10.28）、うらわ美術館（2007.11.27～2008.1.27）、静岡アートギャラリー（2008.2.2～3.23）を巡回した「画家 岸田劉生の軌跡」展に出品された。また1990年に開催された「岸田劉生 麗子と鶴沼風景」展（東京展：西武アートフォーラム、藤沢展：藤沢市民ギャラリー、笠間展：日動美術館）にも展示されたのでご記憶の方もあろうかと思う。劉生の作品を多数所蔵する笠間日動美術館の所蔵品の一つである。

筆者は昨年12月14日に、うらわ美術館に行ってこの「村娘」と対面してきた。

この絵は水彩画といっても鉛筆デッサンのバックだけをセピア色に水彩で塗ったものであり油絵の下絵として描かれたのであろうが残念なことに油の作品はない。白のチョークで25th, august, 1917と制作日の書き込みがある。この日付は最初に於松をモデルに画いた1918年11月より1年以上も前のことになる。

「村娘」は髪を後ろに束ね丸めている鬢の櫛目は通っているようだが、着衣はヨレヨレだし、たすき掛け、襟元もやや崩れているから多分普段の生活姿のままモデルをさせられたのであろう。半襟に花模様のようなものが画かれているのがわずかに娘らしい。

顔は丸顔で鼻が低く薄い眉に、やや離れ加減の垂れ目の二重瞼、生活力のありそうな大きめの口をしっかりと閉じている。その表情からは“画かれている”という緊張が伝わってくる。顔つきは大人びているが、肩幅のせまさを見れば子供の体形がまだ残っている。推定年齢は13～4歳であろうか。

さて、この「村娘」が誰であるか？を推理するのが今回のテーマである。



上：「村娘」1917.8.25（鉛筆、水彩）



左：「芝川氏像」1917.8.23（鉛筆、水彩）

芝川照吉は劉生のパトロンの一人

この二点は中一日置いて描かれた。同じ表現方法なの分かる。

劉生にとって 1917 年はどんな年であったか

ではその絵画活動の記録、その年の書簡、劉生の妻 蔡^{しげろ}の日記をもとにどんな年であったかを探ってみよう。

劉生は 1917 年 2 月 23 日、転地療養のために鶴沼にやってきて佐藤別荘を借りて療養生活に入った。そしてその年の 6 月 24 日には松本別荘に移転している。

なぜ鶴沼に來たのか？ 3 月 2 日付の蔡^{しげろ}の日記につきのような内容の記述がある。

それは前年夏、初期ではあるが右肺炎カタルと診断され暮れには発熱。専門医に診てもらったところ両肺悪いといわれたので暖かい海岸で養生したいと思ったが金がない。困っていた時、白樺同人の長与善郎が 70 円用立ててくれ、その他の金を集めて都合 150 円ほど工面し、ようやく鶴沼にきたのである。暖かい海岸なら他にもあるのに、どうして鶴沼なのか。武者小路実篤は著書『岸田劉生』に「その年（1914 年）の暮れから僕は鶴沼に住むことになり、鶴沼に一年近く住んだ。岸田もよく来た。（中略）僕が鶴沼に住んでいた時、岸田が遊びにきたので、後年岸田が鶴沼に住むようになったのは事実と思う。」と書いている。そして劉生は寝椅子や布団の上で医師の勧めるまま絶対安静療法に入ったのである。

「この家（佐藤別荘）は南西の明いた見晴らしのよい家である。二階の縁に立てば西は富士山が麓までよく見えて続く連山の朝な々々の景色はほんとに美しい。

南は江の島がひと目に見えて海の上を行くかもめのむれや空の模様で変わる波の色など見る時々におもむきがかわって気がはればれする。そうしてこの家は住み心地のよい家だけれども大方この家には六月までしか居ないだろう。それからもう少し奥の松本別荘というのにそこが空いたら移る。そこには西洋館があるので。」という蔡^{しげろ}の日記の文面は当初から松本別荘を借りるつもりが六月まで空かないと知りそれまでのあいだ臨時に佐藤別荘に入ったことが分かり、光線の具合が不向きのため転居という従来説とは異なり興味深い。

絵画活動

- 1917. 2. ? 「林檎三個」（油彩）世田谷新町時代に描かれた
- 1917.2.10~12 草土社名古屋展覽会に油彩 12 点、水彩素描 24 点を出品
- 1917. 2.23 鶴沼、佐藤別荘に転居
- 1917. 4. 9? 「（林檎持てる）麗子」（ペン、水彩）

1917. 4.12 「鵠沼風景」(油彩)
- 1917.4.15 「林檎を持てる麗子」(ペン、水彩)
1917. 4.20~26 第4回草土社展に「白き橋を架したる小川の風景」ほか油彩4点、水彩1点、素描14点を出品
1917. 5. 3 「Kugenuma(白い橋)」(水彩)(筆者注:この白い橋は碓の別荘のすぐ手前にあり翌年の第5回二科展に碓は「鵠沼の白い橋」ほか26点を出品して2度目の二科賞を得ている。この白い橋の風景は横堀角次郎も描いている。)
1917. 5.17 「初夏の小路」(油彩)
1917. 5 油絵画会(会員20、会費月20円で4号油絵一枚頒布)を興す
1917. 6. 7 イチを描こうとしていろいろしたが断念[葵の日記]
1917. 6.21 イチをスケッチする[葵の日記]
1917. 6.22 「瓶と茶碗と林檎一個」(油彩)
1917. 6.23 誕生記念に「赤い帽子の自画像」を素描[葵の日記]
1917. 6.24 松本別荘に移転。初めてアトリエを持つ。
1917. 6.27 「二階よりのスケッチ」(水彩)
1917. 7.11 「青年」(素描)
1917. 7.20 「土瓶とシュスの布と林檎」(油彩)
1917. 7.23 「自画像」(素描)
1917. 8. 9 「田中氏肖像」(コンテ、クレヨン)
1917. 8.23 「芝川氏像」(鉛筆、水彩)
1917. 8.25 「村娘」(鉛筆、ペン、水彩)
1917. 8.31 「湯呑と茶碗と林檎三個」(油彩)
1917. 9.11~30 第4回二科展に油彩3点、素描2点出品「初夏の小路」で二科賞受賞(賞金100円)
1917. 9.15 「青布と林檎四個」(油彩)
1917. 9.20 「二階の窓よりの風景」(油彩)
- 1917.11 作品色刷会(会員制、作品の色刷り複製の頒布会)を興す
- 1917.11.15 「晩秋の霽日」(油彩)
- 1917.11.19 「赤き林檎二個と瓶と茶碗と湯呑」(油彩)
- 1917.11.30 「義母の像」(鉛筆)
- 1917.12.10 「道に生えたる枯草」(油彩)
- 1917.12.15~24 草土社第5回展に油彩21点、素描18点を出品

1917.12.20 「自画像」(コンテ、クレヨン)

注：作品名がゴシック体のものは現存する絵画を示す。

発信書簡リスト

1917. 1.10 松本長十郎あて (年賀状返礼)
1917. 1.23 横堀角次郎あて (来信返礼)
1917. 1.29 椿貞雄あて (悩みに対する激励)
1917. 2.16 椿貞雄あて (送金と転居予告、手伝い依頼)
1917. 4. 2 椿貞雄あて (激励、来訪要請交通費送金許可を問う)
1917. 5. 1 椿貞雄あて (切符送付、制作現況報告)
1917. 6.21 椿貞雄あて (移転予告、手伝い要請、交通費同封、道順案内)
1917. 7. 6 横堀角次郎あて (ハウレンソウと板、恵送返礼)
1917. 8. 3 横堀角次郎あて (激励)
1917. 8.18 椿貞雄あて (画布、溶き油など画材購入依頼、費用同封)
1917. 8.21 横堀角次郎あて (近況報告、激励)
1917. 9. 8 横堀角次郎あて (近況報告、鶴沼来訪を勧誘)
1917. 9.10 椿貞雄あて (絵筆購入依頼、費用同封)
1917. 9.17 長与善郎あて (来信返礼、二科賞のこと他)
1917. 9.27 松本長十郎あて (色刷会成立報告、会費納入依頼)
1917.10. 1 石川秀太郎あて (来訪許可、作品持参要請)
1917.10. 4 石川秀太郎あて (来訪承諾)
1917.11. 2 和辻哲郎あて (作品譲渡承諾、代金百円)
1917.11. 4 椿貞雄あて (椿の画会入会、11 月分会費同封)
1917.11.18 和辻哲郎あて (額縁注文依頼の承諾、来訪勧誘)
1917.12. 3 石川秀太郎あて (来信返礼、近況報告、草土社展予告)
1917.12. 7 和辻哲郎あて (お使いが届けたものへの礼状)
1917.12. 8 志賀直哉あて (16,7 と安孫子行き、訪問予告)
1917.12.11 石川秀太郎あて (草土社展展示の手伝い要請)
1917.12.12 和辻哲郎あて (原の依頼による絵の代金と納入時期通知)
1917.12.13 和辻哲郎あて (前便の補足)
1917.12.19 志賀直哉あて (志賀邸訪問、壺借用の礼状、安孫子再訪予告)

「葉の日記抄」から要約(岩波書店『岸田劉生全集』月報より)

1917.3.2 しばらく日記を付けなかった。前年夏、麗子大腸カタルで新宿の多納病院に入院、劉生さまも大沢医師により肺尖カタルと診断され、駒沢新町に転居。年末、劉生 37 度 3~4 分の熱。高田博士の診察を受ける。長与善郎の好意で鶴沼に転地療養が実現する。きのう、高村さんからお手玉と人形と自動車のおもちゃを送られ麗子は大喜びする。[佐藤別荘のくだりは前述]

1917.3.4 庭に出て松露を探したが見つからない。劉生さまの熱 37 度 2 分。一家の不運を嘆く。

1917.4.2 31 日、上京、長与様宅に行く。麗子あずけて茂子さん妹のたかちゃんと一緒にローヤル館に「その妹」を見にゆく。幕ごとに泣いてしまう。房子さん雪子さん文子さんにもお目にかかる。

1917.4.11 今年はお金に困りそうだ。でも劉生さまの病氣快方に向い熱 36 度 8 分体重 14 貫 600 匁。毎日写生に出ているのにこういう状態なのはほんとにうれしい。ここは不便で一寸のお金の融通も利かないから本当に困る。

1917.4.15 この頃劉生さまはお天気や曇った日は外で写生をして雨の日は部屋の中で静物を描いていられる。熱最高 36 度 9 分、ほんとにうれしく思う。

1917.4.25 一昨日、捨てられた子猫をひろってきたがところ構わずお小水をするので昨日捨てて来た。イチは猫が嫌いで大喜びしている。今朝、劉生さま散歩に出てまた拾って来た。今度は裏の縁側にばかり置くことにする。

1917.6.1 先月 20~22 日まで武者さんご夫婦が東屋に来ていらした。今は中屋の借家(筆者注:中屋の借家ではなく硯家の別荘)に、硯さんが来ていられる。劉生さまは昨日半日そこにいて爺やと五目並べをしてくる。知った方のいられるのはほんとによい。今月から画会をまた興す。高村さん入会をいってこられた。

1917.6.3 古屋さん来られるはずが中止となる。硯さん昨夜戻ったそうでお願いしたカンバス持ってこられる。2 階で午前中話していらした。

1917.6.6 1 時ころ長与さんと犬養さんがいらした。硯さんがよい絵をたくさん持っていられる(筆者注:硯は第 1 回二科展に「女の習作」で二科賞受賞。賞金を全部はたいて丸善で豪華な複製の入った美術書を買ってしまったという。)と三人で出かけられたが写生に出てお留守とか直に帰ってこられる。やがて硯さんどっさり絵を持ってこられる。私もお二階で見せて頂く。

1917.6.7 劉生さま昨日の絵を返しに硯さんのお宅に行き爺やと五目並べして

こられる。イチを描こうといろいろなさるがまたいつかとてやめにする。

1917.6.10 イチが寝ているので不便している。劉生さまリーチの茶碗とピンとリンゴを描いていられる。そのあと裕さんにいかれたら川幡さんとお二人でこちらに向かわれたとか、やがてお出でになる。川幡さんとは久しぶり。

1917.6.18 西洋館が空きましたと丸山が言ってきたので劉生さまは見に行き帰りに建具やによって絵を掛ける長押のようなものを付けるよう頼んでこられる。

1917.6.20 心配なのは引っ越しの費用だ。

1917.6.21 イチの顔スケッチなさる。

1917.6.23 明日は引っ越し、椿さん来られる。劉生さまの誕生日、晚餐は舌ヒラメのフライでお祝いする。

1917.7.4 6月24日、この家に引っ越した。家賃10円だ。椿さんが手伝って下さる。4日ほど前から中川様が泊まりに来ておられる。その日、信州から河野様も来て一泊して帰られた、3日前は清宮さん、昨日は横堀さん。そこへ裕さんも来られて一時までトランプをした。

1917.7.10 昨日、親子3人とイチとで海に行く。麗子はイチと夢中で遊ぶ。帰途、医者（福田医院）に寄る。

1917.7.17 13日二人で上京。蔡も肺の疑い、大学病院で検査。東京で一泊、いろいろ所用を足して14日遅くに帰宅。15日イチを東京に宿入りにする。16日夕方イチ白玉粉を持って帰る。

1917.7.20 中川様お泊り。午後4時ころ裕さんをお誘いして麗子を連れて海に行く。中川さんが麗子を入れてくださった。鶴沼もだいぶ夏のお客でにぎやかになってきた。海水浴場も出来た。画き続けていた静物画が完成。

1917.8.2 （劉生の雨乞い竜の絵入り）芝川さんから送金の書留。

1917.9.1 劉生さま二科に出す絵を持って一泊の予定で上京。

1917.9.3 来信：椿氏、裕氏、小山氏。劉生さま帰り遅く長与さんの『彼らの運命』を読んでいた。

1917.9.5 劉生さま癩癰を起す。ここはあんまりお友達がいらっしやらないのがいけないのだ。

1917.9.8 新聞で二科の入選人名をみる。5点とも出ていた。椿、中川さんも出ていた。

1917.9.12 昨夜からイチにイチの反物を縫わせている。

1917.9.16 「三つの林檎と青い布の静物」完成。こう絵ばかり暇なしに描いて

いられる人があるだろうか。

1917.9.19 17日の新聞で二科賞は劉生さまだけと知る。その「初夏の小路」が売約になったと姉から通知。買うという人は渋沢の息子とのこと。この23日、劉生さま二科を見がてら武者さんの家に挿絵を持っていかれる。昨日は長与さんの別荘から見事なダリアとばらの花束をとどけてきた。

1917.9.29 来信：武者小路氏夫妻、柳氏、椿氏

23日二人で上京、はじめて麗子をイチに任せてきたので心配。長与さま宅に寄る椿さん中島さんがおられる。二科を二人で見る。随分皆下手なので笑ってしまう。長与さま宅に戻る。小泉さん犬養さん土屋さんが来られていて賑やか。劉生さまは木村さんに寄って武者さんに行かれる。

1917.10.5 今日ようよう待っていた二科会から為替がとどいた。嬉しかった。154円だ。午後から劉生さま頭痛激しく胃が起こったらしく吐いて苦しそう、福田さんではとても駄目なので高松さんを始めてお呼びする。赤黒い血を吐く。豊川さんを回って帰りかけていた高松さんをも一度お呼びしてお目に掛ける。こんなものを吐くようでは胃潰瘍のはじめ。

1917.10.18 今日、和辻さんがいらして二科にだしてある「静物Ⅱ」を買う人があるといわれるのでお約束する。まだ他にも外のを原六郎の息子（筆者注：原邦造）が買いたいと言っているそうだ。

1917.11.13 色刷会の会員は193人になった。随分増えた。色刷りは250枚刷ることにした。和辻さんが見えて「静物」をわきに3枚売ってお約束をする。1枚「壺」の絵はこの間50円で持っていかれる。小泉様のお宅に初めて伺う。和歌子様にお目にかかる。小泉様は長与様と千家様にいらして留守。

以上から分かることは

- 1) 3月は制作を自粛していたようである。おそらく絶対安静を忠実に守っていたのであろう。その甲斐あって、この一ヶ月ですっかり体調を回復した。
- 3月31日には家族で上京、武者小路の戯曲『その妹』の上演を観劇している。
- 2) 4月には野外での制作を始める。蔡の日記にも4月11日付、「毎日写生にお出かけになる。」15日付、「お天気や曇った日は外で写生、雨の日は部屋の中で静物を描いておられる。」とある。
- 3) 6月にイチをスケッチしている。イチは佐藤別荘に来て間もなく雇った女中の名である。

イチについて麗子は著書の中で次のように書いている。

「佐藤別荘に越してしばらくするといちやというまだ若い女中さんが来た。丸顔の小太りのひとだった。いちやは台所でお米を研ぎながら“いちやとお嬢ちゃまはお利口さん、いちやとお嬢ちゃまはおバカさん”と歌ってくれた。

（中略）佐藤別荘に越して間もなくやがて「村娘於松の像」として沢山の父の絵のモデルになったお松ちゃんのお母さん（葉山サダ）が台所の手伝いに来てくれた。お松ちゃんの家は佐藤別荘のすぐ近くだった。お父さんは虎さん（葉山虎吉）といって漁師を業としている人だったが、お酒が好きで、お松ちゃんのお母さんはそのため苦労が多かった。お母さんがうちへご飯炊きに来る時お松ちゃんも一緒に来て私たちは友達になった。」

- 4) 6月、松本別荘に移ってからは旺盛な製作活動が始まる。リストにあげた作品は震災、戦災を免れて残っているもの、または作品は失われたが記録が残っているものに過ぎない。たとえば草土社第5回展油彩21点出品のうち旧作はわずか4点である。17点は春の第4回展のあと制作されたものと考えられるがリストでは10点しか記録されてない。
- 5) もうひとつ注目したいのは交友関係である。白樺の仲間（志賀直哉、武者小路実篤、小泉鉄、長与善郎、千家元麿、犬養健など）草土社の仲間（中川一政、河野通勢、椿貞雄、横堀角次郎、川幡正光、中島正貴など）フューザン会の仲間（高村光太郎、清宮彬、木村莊八、裕伊之助など）、パトロン（芝川照吉、原善一郎、西郷健雄、原邦造など）その他（和辻哲郎など）まさに多士済々である。なかでも特筆すべきは、この時期、裕伊之助との交流の親密さが、蔡の日記によって明らかになったことであろう。

「村娘」のモデルは誰か？

劉生は非常な早描きのできる画家であつたがモデルが動かずにじっとポーズを取る時間がないと人物画を描かなかつたようである。それは執拗なまでに細部を追求する姿勢がそうさせたのであろう。だから、戯画のようなものを除けば、ふと見かけた人物をデッサンするということはあまり無かつたらしい。したがって彼の人物画のモデルは家族、知人、友人、パトロン、肖像依頼者に限られる。

劉生が村の若い娘を知る機会はこの時期、前後の事情から推量しても殆どなかつたのではないかと思われる。

では誰か？ 一番可能性の高いのは女中にきた「いち」である。6月佐藤別荘

時代に一度描いているし、新しくアトリエをもった劉生は、この夏、創作意欲満々だったに違いない。描かれている容貌も麗子の記述の特徴に合致するし、たすき掛けの普段の姿であることも女中であれば当然であろう。しいて他の可能性を考えるならば、お松の姉ヒヨである。後年、お松の弟の正ちゃんを描いているから、姉を描いても不思議ではないし、ヒヨも母について劉生宅に行ったことがあったかも知れない。しかしヒヨはお松より一回り以上年長だから当時 20 歳前後、姉妹ならば容貌も於松と似たところがあってもよさそうだがそれもないからヒヨの可能性はないといってよからう。

以上を踏まえて、この「村娘」は「いち」と断定して差し支えないのではないか、というのが筆者の結論である。と同時に鶴沼村の娘ではなかったこと（7月17日の葵の日記に「イチを東京に宿入りにする。」と書いてある。）を鶴沼の住人として少々残念に思うのである。東京娘なのに村娘？と思われるかたもあろうが当時、山手線の外側はみな村であったから東京産の村娘は十分存在したのである。

（おかだ てつあき）

参考書籍

『岸田劉生全集』全十巻 および（月報）		岩波書店
『父 岸田劉生』	岸田麗子著	読売新聞社
『岸田劉生』	土方定一著	日動出版
『岸田劉生』	武者小路実篤著	小山書店
『岸田劉生』	富山秀男著	岩波新書
『岸田劉生』椿貞雄の回想から	東珠樹著	雪華社
『岸田劉生とその周辺』	東珠樹著	東出版
美術雑誌『アトリエ』岸田劉生追悼記念号	昭和5年2月号	
『わが半生記』	碓伊之助	北国新聞連載記事

展覧会カタログ

岸田劉生 麗子と村娘特集	1958年
岸田劉生展	1970年
没後50年 岸田劉生展	1979年
岸田劉生展	1988年
生誕100年 岸田劉生 麗子と鶴沼風景	1991年
生誕110年 岸田劉生展	2001年
画家 岸田劉生の軌跡	2007年

藤沢・鵜沼の歴史をカメラで残した

「鵜沼書店」 福地誠一さんのこと

桑原玲子（会員）

家の前が「鵜沼書店」

私たち家族、父と母と私は昭和15年に鵜沼海岸駅前に引っ越して来ました。父はそこで給排水設備工事の店を構えました。うちの前は番場米店、ななめ前が鵜沼書店でした。

私は小学校へ入学前なので、父と母に毎晩百までの数を数えさせられていました。読んだり書いたり早くから出来たのに、それがなかなか出来ないのです。幾晩かかかって一生懸命おぼえて出来るようになりました。出来たら本を買って貰うことになっていたからです。

そしてななめ前の本屋のおじちゃんに選んで貰ったのが、講談社の絵本『孝女白菊』でした。それが自分の本を持った初めで私はおじちゃんが好きになったのです。

戦争が終わったある日

爆弾が雨あられということこそありませんでしたが、鵜沼の子どもにも戦争は苦しいものでした。運動靴からノート、クレヨン、鉛筆、みな配給で教室で先生がくじ引きで決められました。

本なんかなくて母がとっていた『主婦の友』に毎月掲載されていた獅子文六の小説なんかを読んでいました。幸いなことに戦火に逃げ惑うほどの事もなく終戦となったのです。

戦争が終わってどのくらいの日が経ってからだったか、いつものように本屋のおじちゃんが店先で着いた本の荷を解いたり棚に仕分けしたりしているのを私が見ていたら「あのね、これ、広島と長崎の原爆の被災地を撮った写真集が出たんだよ」とアサヒグラフを手にとりて見せてくださいました。そして「これね、エスペラントに直して各国のエスペラントの支部に送ったんだよ。」と話してくれました。福地誠一さんはエスペランティストだったのです。

戦後の藤沢

昭和21年の食糧危機は深刻でした。米の配給はわずかでそれもだんだん少なくなりました。食糧難は藤沢も同じでした。そのうち終戦のドサクサに軍や公の物資が私蔵されている情報などが入ってきました。



父は近隣の人たちと話し合いこれらを市民に公平に分配されるよう隠匿物資摘発隊を組織して活動を始めました。それは市と連絡をとり制服の警官も同行させ摘発した米や麦は手早く配給ルートに載せるというもので、新聞で報道もされました。

昭和22年4月新憲法による最初の地方選挙があり、近隣の人たちに推されて父は立候補することになりました。その選挙事務所びらきに近所の人々の顔が揃った時のことです。乾杯のあと、「ご近所だから大和田さんに出て欲しい」「ご近所だから…」と続く中で本屋のおじちゃんは「私はご近所だから大和田さんに出て貰いたいわけではないのです。たとえご近所でなくとも出て欲しい人だと思っています。」ときっぱりおっしゃいました。私は「おじちゃんてすごい人だなあ」と一層おじちゃんを好きになりました。

写真展「鵠沼の五十年」

昭和58(1983)年の春とおもいます。そのころ私は一木通りを北に突きあたり、ちょっと左に折れた所に住んでいましたから、夕方、鵠沼海岸商店街で買い物の後、鵠沼書店を覗くのがお定まりのコースでした。

ある日のこと、書店の奥、レジの前に次女のみさ子さんがいらして顔が合ったとたんに「玲子さん」と呼び止められました。「お父さんが癌なのよ」とおっしゃるのです。私は一木通りを自転車を漕ぎながら“おじちゃんのために何が出来るか”考え考え家に着きました。「福地さんのおじちゃんが…」と夫に伝え「わたし、写真展をやってあげたい!」「ああ、いいんじゃないか、是非やってあげ

なさい。」と賛成され、早速、翌日から準備を始めました。公民館に部屋を借りに行くと、個人名の展覧会は出来ないことが分かりました。そして何人かの手伝って下さる方も出てきて展覧会名は「写真展 鵠沼の五十年」と決まりました。

写真家福地誠一氏

展覧会の準備は大変でした。しかし一番大変だったのは福地さんご自身だったと思います。長年撮り溜めてある原板を整理したり、探したり、それを引き伸ばしたり、それはそれは大変な作業だったのです。私は主婦ですから毎晩、夜の片付けが済むと大急ぎで自転車にのって駅前の大和田の旧店舗まで駆け付けます。

そこは店舗移転の跡、空屋になっていたのを準備室にしていたのです。机に写真を並べたり、説明文を書いたり、胸の奥は悲しいのだけれど、おじちゃんと一緒にの仕事は楽しく進みました。そんなある時でした。「これ、何時撮ったのですか？」と私。それは海岸の遊歩道路（今の134号線）が江の島方面にゆっくりカーヴしていて背の低い松が道路の両側に生えている写真でした。「ああ、それね、ちっとも面白くないんで現像してなくてさ、夕べ現像したんだ。今にびっくりするほど風景が変わっていくと思ったんだよ。」といわれました。その先見の明。

ほんと、おじちゃんは偉い人なんだなと感動の連続で、あの幾晩かの作業の時間は、忘れられません。

街の人がみんな見に来た

1984年9月、写真展「鵠沼の五十年」は街の人が殆ど見に来たと云えるほどの大盛況でした。「あれ、これ私だ！」「〇〇ちゃんだ！」友人知人の幼顔や懐かしい風景写真がビッシリだからです。新聞報道もされました。後日、高木和男さんの知り合いの出版社から『福地誠一写真集“鵠沼の五十年”』が出版されました。

写真集は鵠沼書店に置かれたり、友人知人が手分けして持ったものですから、たちまち品切れになりました。復刊のこえも上がりましたが実現しませんでした。

『市制五十周年記念歴史写真集 ふじさわ』藤沢市発行にも福地誠一さん撮影の写真が多数、使われています。

福地誠一さんは昭和60（1985）年5月1日にお亡くなりになりました。

（くわはら れいこ）

「鵠沼を語る会」活動の記録

(平成19年10月～平成20年3月) 総務部

運営委員会 9月25日(火) 11名出席

平成19年10月例会 10月8日(火) 10時～12時 19名出席

議題1 会誌「鵠沼95号」配付について — 出席した会員に手渡し、他は配付表に基づき担当者に依頼した。

議題2 鵠祭(クグイまつり：鵠中文化祭、9/22)について — 校庭に植樹した『楷の木』の由来および校長の談話文言、開校当時の写真を展示した。

議題3 鵠沼地区公民館まつり(10/27,28日)について — 大会としてのテーマを『楷の木』とする旨の経緯を説明し展開を図った。

お話 — 「長谷川路可ー出会った人々そしてエピソード」、鵠沼出身の画家長谷川路可について長年に亘って調査研究されている渡部瞭会員より、前月に引き続き今回は多岐にわたる交流についてビジュアル機材も用いてお話していただいた。

運営委員会 10月30日(火) 12名出席

平成19年11月例会 11月13日(火) 10時～12時 18名出席

議題1 公民館祭りの報告 — 多数の会員のご協力により会としてのテーマ『鵠沼に楷の木を』の展示を行った。鵠沼中学以外にも植樹の声が聞かれた。

議題2 会誌「鵠沼96号」について — 平成20年3月発行予定の構想が報告された。併せて執筆希望者募集の展開もはかった。

議題3 今年度のプロジェクトの進捗状況について — 各チームより途中状況が報告された。

議題4 その他 新年会について 概要が説明された。

お話 — 「思い出の童画家黒崎よし介さん」、画伯と永年交流があった市川会員より、褒めて育てる教え方をはじめ人となりが偲ばれる思い出話を伺った後、郷土資料展示室にて開催中の「思い出の童画家黒崎よし介さん」展の説明を受けながら観覧した。

運営委員会 11月27日(火) 11名出席

平成19年12月例会 12月11日(火) 10時～12時 21名出席

議題1 新年会について — 1月15日例年通りアコレードにて例会に引き続き行う予定の内容が説明された。

議題2 会誌「鵠沼96号」について — 掲載予定の項目案について報告された。

議題3 今年度のプロジェクトの進捗状況について — 各チームより途中状況が報告された。語る会の資料のなかに今となつては数少ない内藤千代子の出版本があり、研究者のためにも復刻版で公開する等、内藤千代子の新たなプロジェクトを設定する旨の報告がされた。

議題4 その他 — 佐江衆一特別展の報告、ふれあい荘清掃参加協力依頼、サークル交歓会報告、来年度部屋取り協力依頼の展開があった。

お話 — 「鵠沼の海辺の変化について」、今回の会場（海辺に面したサーフビレッジ）に相応しいテーマで内藤会長より、明治・大正・昭和の海水浴風景、軍隊行進、道路整備他当時の世相をスライドも交えて説明、解説をしていただいた。

注) 今月は公民館が冷暖房工事の関係上場所を海岸の公共施設のサーフビレッジの会議室とした。

運営委員会 12月18日(火) 12名出席

平成20年1月例会および新年会 1月15日(火) 11時30分～14時29名

出席 場所 鵠沼マリンロード(鵠沼海岸商店街) アコレード

議題1 旧後藤医院の改装完了 — 1月25日オープン記念、鵠沼橋市民の家となる旨の報告がされた。

議題2 会誌「鵠沼」96号について — その後の進捗状況が報告された。

議題3 今年度のプロジェクトの進捗状況について — 各チームより途中状況が報告された。

新年会 内藤会長挨拶、鈴木会員の音頭により乾杯、出席会員による今年の目標、近況等披露。歓談、ビンゴゲームにより和やかなムードの中懇親を深め閉会した。

運営委員会 1月29日(火) 12名出席

平成20年2月例会 2月12日(火) 10時～12時 21名出席

議題1 新年会の報告 — 状況および会計報告がされた。

議題2 会誌「鵠沼」96号について — 掲載項目の決定およびその準備状

況が報告された。

議題3 楷の木植樹について — 鵠沼地域で今後具体的に推進していくことが報告された。

議題4 今年度のプロジェクトの進捗状況について — 各チームより途中状況が報告された。

その他 — 公民館のロッカー移動応援協力依頼、サークル交歓会の報告、旧後藤医院鵠沼橋市民の家開所式の報告、湘南海岸友の会に入会した旨の報告がされた。

お話 — 「岸田劉生『もう一人の村娘』」について、岡田会員の長年に亘る調査研究により、日記、作品完成日、交友関係等から推察された新たな事実を、資料も交えてお話していただいた。

運営委員会 2月26日（火） 11名出席

平成20年3月例会 3月11日（火）10時～12時 17名出席

議題1 会誌「鵠沼」96号について — 原稿集結状況が報告された。3月31日製本および発行予定。

議題2 今年度のプロジェクトの進捗状況について

- 1) 鵠沼ゆかりの文化人展の冊子化は来年度に製本化予定。
- 2) 今井達夫遺稿まとめは活字化進行中。
- 3) 語る会の資料整理は要否の仕分けが略終わった。
- 4) 内藤千代子著作の復刻版は2冊完成した。

その他 — 今月の公民館での講演会予定、サーフビレッジの展示の案内がされた。

お話 — 「旧後藤医院の建物について」、始めに鵠沼の緑と景観を守る会の北村会長から、建物が鵠沼橋市民の家として保存されることになった経緯が説明された。紹介ビデオに引き続き、建築調査に携わった鵠沼の緑と景観を守る会の建築士桑田さんからスライド映像も交えて建物の特徴、工夫等についてお話していただいた。

注) 本建物については、岡田会員執筆の会誌鵠沼第93号の後藤医院（鵠沼分院）の記事も参照されたし。

例会終了後、川上元会長の七回忌にあたり鵠沼海岸7丁目の「本真寺」に有志で墓参に行った。 (文責 佐藤 弘)

編集後記

- *一昨年、鶴沼市民センター敷地内に植えた鶴沼を語る会創立 30 周年記念樹「しだれ桜」が見ごろを迎えます。
- *今号は例会で「お話」をして下さった方々にそれぞれのお話の内容について書いて頂いたものを五話分まとめてお届けします。例会に出席できなかった会員にも、どんな内容のお話がされたかをお伝えいたします。これが会誌『鶴沼』本来の役割かと思えます。
- *'07 年 6 月例会の「お話」は東京大学大学院生の嵯峨景子さんの「内藤千代子と『女学世界』」でした。嵯峨さんには内藤千代子と鶴沼について、その後の新資料を加えて書き下ろして頂きました。嵯峨さんは「内藤千代子資料館」<http://sagakeiko.net/naitochiyoko/>という HP を設けていますから興味のある方はアクセスしてみてください。
- *8 月例会は鹿地亘事件に直接関わった国会議員・猪俣浩三氏の令息、猪俣良樹氏に「鹿地亘事件について」話して頂きました。事件に関与した方であれば知り得ない興味深い内容のお話を書いて頂きました。
- *9 月例会「長谷川路可一人と作品」、10 月例会「長谷川路可－出会った人々そしてエピソード」と連続で渡部瞭会員にお話をして頂きました。同会員には 95 号に「長谷川路可伝（上）」を、今号にその（中）を、97 号に（下）を引き続き執筆をお願いし掲載する予定です。
- *'08 年 2 月例会は「劉生研究：もう一人の村娘」と題して岡田哲明会員のお話でした。これも同会員に記事にして頂きました。
- *鶴沼海岸駅前の鶴沼書店主であった福地誠一さんの思い出を桑原玲子会員に書いて頂きました。
- *'07 年は長谷川路可生誕 110 周年ということで渡部会員の「長谷川路可伝」は'07 年度発行分（95,96 号）で完結する予定でしたが、寄稿文が力作揃いで皆ボリュームが多く、やむなく次年度にまたがっての発表になりました。そのため、シリーズ化している「鶴沼の歴史的建物をたずねて」と「今井達夫遺稿」も割愛せざるを得ませんでした。原稿がなかなか集まらず、苦勞するのが常ですが嬉しい番狂わせです。
- *春と秋、年 2 回発行する会誌『鶴沼』は再来年の春には 100 号を刊行することになります。記念号として特集を組みたいのですが、良い案はないでしょうか。会員の皆様のご提案をお待ちしています。（岡田）

『鵠沼』 第96号
平成20年 3 月31日発行

本誌の記事引用の際は
ご連絡ください

編集・発行 鵠沼を語る会
藤沢市鵠沼海岸2-10-3
鵠沼公民館内
電話0466-33-2002

URL=<http://kugenuma.sakura.ne.jp/>